世界婦人

◎本號目次

△訪問客の心得（一）安部磯雄
△伊豆の元旦（一）あけぼの生
△婦人偶感（一）革田命作
△娼婦を憐れむ（三）芙花子
△病床雜讀（三）長加部生
△農科と理科（四）増田操
△握手（五）舟木孤舟
△愛（六）一葉亭
△男（六）溪水
△新紀元晩餐會（七）嘯
△豐年樂年（七）グラ〱生
△お花（七）渡邊浩洋
△日本協會に就て（七）ひで
△郷歴（八）林孤春
△ゴーリキー著の放浪（九）某生
△旅行の色々（十）ひで
△海外時事（十二）
△海内時事（十二）
△其他社友の消息等（十一）

訪問客の心得

安部磯雄

訪問客の多きことは或意味に於て有り難きことに相違なきも、これが爲め少からぬ時間を奪ひ去らることは、迷惑なり。訪問客は先づ其主人が多忙の人なるか、或は比較的閑散の人なるかを考へて後、適宜の方法を採らざるべからず。閑散なる人を訪ふ場合には下らぬ世間話を爲して時間を潰すも差支なからん、然も繁劇なる人に對する時に於ては大なる注意を要す。世人は往々手紙を以て容易に辨ずべきことをも尚は面會して談せざれば滿足せざることあり。或は玄關にて立ちながら語り得べきことをわざ〳〵客間に入らざれば話さゞるものあり。彼等は手紙を以て用を辨じ、玄關にて立ち話しすることを失禮なる擧動と考へ居るが如し。甚しき誤りといふべし。多忙なる人を訪問するに當りては玄關にて用事を辨ずるが良し。手紙を以てするは更に宜し。人を訪問して長時間に亘るは一の不道徳なる行爲といふも差支なかるべし。古來此の如き來客の爲め惱せられたる例少からず。箒を倒に立てゝ手拭の頰冠をさせるが如きは來客を退去せしむる一策なり。或人は來客の長座を拒まんとて冬中火鉢を出さず、窓の障子を明放すを常とせりと聞く。是れ頗る亂暴なる方法にはあれども、之に依りても非常識なる來客が如何に迷惑がられて居るかは想像が出來るなり。或人は玄關の障子に左の如き句を書きたり

　世の中に客程いやなものはなし

或日友人來訪して之を見しが、大に怒りて荒々しく障子を開き内に入りしに、向ふの襖にもこの句のあるを見たり。曰く

　こは言ふものゝお前ではなし

無遠慮に障子を明けて跳り込む程の友人ならば少しもいやなことはあらざるべし。されど親友にもあらざる人が他人を來訪するに當りては、よし其主人が快よく彼に應接することあるも、彼は其主人に迷惑を感せしめぬ間に早く退去するの覺悟なかる可らず

以上陳へたる所は男女に拘はらず訪問客の等しく心得べきことなれども、婦人間の訪問に就ては一層注意すべきの事少からず。婦人の中にも殊に主婦たる人は毎日秩序を立て、一家を經營しつゝあるが故に、其仕事に邪魔を爲すが如きは訪問客の勤めて避けねばならぬ所の事なりとす。主婦は果して多くの女中を使役して居るか或は自ら炊事をも司どるの人なるか。彼には幼少なる子女はなきか。或は亦彼の看護すべき病人のあるのではなきか。來訪者は此等の事を考へて訪問するに適當なる時を擇び、亦其時間を伸縮するの覺悟あるを要す。來訪者の不注意なる爲め家庭に於ける日課が幾度破壞せらるゝやも知れず。是れ何人も長く堪へ得る所にあらず。社交が益繁劇を加ふるに及びては、應接日を定むることゝ、社交的訪問と事務的訪問との區別を設くること等も必要なることならん。然れども此問題の解釋は必ずしも形式的の事に求むるを要せざるなり。若し訪問者が少しく常識力を働かせ、主人の境遇を推察することをなさば、其間に何等の迷惑もなく損害もなくして、容易に事を辨じ、併せて社交の目的を達するを得べし。己れの欲せざる所を人に施すこと勿れと古人は言へり。是れ來訪問の心得べき金言にはあらずや

伊豆の元旦

あけぼの

海の眞東、日の出の光を浴びし初島は、紅桃色に染め出でられぬ。あな麗はしと見てあれば惜しや灰色、湧出ける雲に隠れつ。初島はやがて黒う海中に横はりぬ。

忽ちにして横線を引ける金色の隙間より、朧々たる旭日の光、八紘に輝き渡れる其跳躍またなく神々し、初島の北に影映を宿せる帆船一つ浮けるにか飛べるにか。

熱海を取り圍める南の斷崖魚見崎を少し外れて、遙に展望すれば、あな懐はしき大島よ、定に煙霞漂渺の彼方に、かすけき其優姿を横ふるは。初島夙くに覺め出でつるに、やよ大島！汝はまだ世の曉を知らざるか。疾く起きよ、疾く醒めよ、起つて速に朝の粧を整へ、光輝宇宙に顯現せる『大自然』の曙光に浴せずや。

心いつとなく大島美人の優姿にあこがれ出で恍惚として我を忘れんばかり、唯詩的感想のみぞはびこれる。

眼を閉づれば脚下に、怒濤雷の如く、梓潟又轟々として天地も爲に覆り地軸も爲に摧けんばかりなり。轟きに詩膓自ら爲の式にあこがれては、脚下の砲撃雷殿の鼓の如く聽きなされしが兩眸輕く閉ぢては、すはこそ我世と誇しは耳の天下。

巖を嚙み峭を轟つ浪の何ぞ雄々しきや。腕こそ痩せたれ我れも男兒一匹、小さき胸も潮と湧く血に熱しては狂はざるを得んや。

「底ひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にこそ仇浪はたて」さはいへ、我は惑ふ、深くとも活生命なき「死海」の如き、將た之を何とかせむ。

若かず天地四海をうち連ね、互に氣脈を通ぜる海洋の、其怒濤と成りて、迷信深き人の心の朽城に突貫し肉薄する、其雄々しさ其痛快さ。

誰れか又其高下深淺を論ふものぞ。

女子教育！、實學の鼓吹、私學の無氣力、いざ起たん私學の同盟!!!

出獄廿年目の紀元節感

ひで

今日は出獄二十年目の紀元節である　顧みれば半世紀の如し、まだ二十年前といへば、容姿も出端の筋肉緊り、血色櫻桃を帶び希望の表情は遺憾なく發揮されて居つたであらう、ア、面影の變らで歳の積れかしとは假令ひ小野の小町ならずともすべたの者々とても此髀肉の歎はある誰れにしてもがないものはないでしやう、否も内の方面のみ顧みては、已に死の淵に瀕せる精思はれて全く萬事休するのですが、何んだか私には祝日こんな囁きが聞えるお前は青春の時代を五年間も若駄らぬ牢屋などて過したから、二六時中眞面目に働くなら、いつまでも、新思想を注入して、決して精神的には老い込ませないぞと、こうもその故か、喜んで青年男女の時代思想を歡迎する時によると、此年になつて、大人氣ないと、恥かしくも思つたりしますが、凡ての男子の樣に尊大な驕慢な生噛りの辭に、自分の言ふ事が眞理である誠實であると何事につけ手前味噌で然らさうにして居るのが可笑しくてならない、もう年をとつてる男子は時勢の進運は物質的の方にのみ了解されて、精神的には解釋せられんのではありますまいか板垣さんも先日新年宴會にて、板垣死すとも自由は死せず、と曾て刺客に襲はれんとせし時の語を引用して大氣焔を吐かれしと聞く、當時の自由黨員は今將に何處にあるのです、彼等の熱中せし言論の自由も集會の自由も、また實行されぬし、議會せし立憲政體も、あの理想ではないか、此頃はもう政友會の元老だとか何だとかいつて、お金も澤山貯めたし位地も出來て安心されたか遊俗に大家高星を構へて、時々茶の湯などに耽り仙を氣取つて居らるゝ、栗原亮一氏の如きは往時優倫伯に隨作して歐米に漫遊せられし時、左の詩作あり御本人は平常朗吟して當時を追懷す此意氣飛んで甑々

血涙化爲刑場赤、萬民打擲與鉛鍋、焚書坑儒
自招禍、苛税酷法獨空乏、投路易者則路易、羅
馬佛民弑君王、昨不見凶報從來、如蟻鎖、積
惡之家有餘殃、

其當時の栗原さんは、未だ中にも軍衣で政家に食客されて居つたとの事であると、二十年前を想ひ起して懷舊の涙潸然

まだ何かと思ひ起せし事が、書きたかつたのですが、この月始めより、炊事を手傳つて呉れたる、おばさんが、鄕里の病氣で歸つたのでおさんどんもしなくてはならんし、今日は紀元の晩餐會もあるしと、其準備に心が奪かれるので憐れ記事は止めました、アヽ、年々歳々花相似たり歳々年々人同じからず、昨年の紀元節には日刊平民新聞社員一同を招じて、聊か祝意を表せしに幾許もなく、石川兄忠諫に觸れて獄に下り、堺、山川、大杉の諸氏亦獄に投せらる、而して、昨が紀念日なる、昨年の祝日は實に歳々年々人の同じからざるを證するなり。寔に果敢なき儚みなるかも。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

海外時事

佛國の婦人勞働者

婦人の勞働者

佛國で最近の統計によれば、男子勞働者は三百三萬三百八十七人で、婦人勞働者は百八十三萬四千二百十七人から居る、婦人勞働者の殆ご半數九十萬六千五百十二人は內職だ、且つ其の大多數はいろ〳〵衣服に關した事をやつてる內三十八萬七百七十九人(男子は七萬八千百三十人)は、たとへば製衫だとか、仕立物とか、洗濯業とか何とかで着物其の物にあたる職業だ、三十三萬七百九十七人(男子は三十萬五千九百六十七人)は機織業だ、或る地方では百分の六十八、六は婦人勞働者で、その樣に男子よりも婦人の方が多數なる所が數外ある。

「若し婦人勞働者の境遇が惡いならば、誰れか我れ〳〵を恐懼せしめる樣な社會的騷動を起すことが出來る」と當局者が云つた程だ、

勞働時間

十九世紀の中頃は、やはり英國なんかと同じく隨分ひどいやり方であつた、規律なんかちつともなかつたが、此の頃では英國と同じ樣に、立法的の規則が出來た、マア大抵一日十時間半乃至十一時と云ふ定めだ、けれど小さな工場や內職をやる所では別にこんな制限なんてものはなく、自分勝手に、或は夜通し一秒も休ますに働かすと云ふ事もある、

婦人の賃金

此の國では婦人の勞働と云ふものは男子半分のそれよりも値なきものであるのだ、男子の最高賃金が平均七フランク、五十センツと云ふのに、女史はたつた三フランク二十センツしか取れない、それでも五十年前の事を比べると、今は中々よい方なんだ、女で一日、二フランク、或は二フランク半なんて取れるのは餘程よい收入なんだ、が資本家の事業にして、最も長い最もつらい境遇にゐる者に添ふものはやはり最も底廉なる賃金である、羊毛業では、其の賃金は五十センツ、乃至一フランク五十センツの間にあるが、絹織業者はたつた七十センツ乃至八十センツ位しか得られない、又、紡績會社の女工は一日大抵一フランク十センツ乃至一フランク七十五センツ位取つて居る

そこになると英國なんぞと非常に異なる、英國の元料を取り扱ふ女工は、やはり男子と同じだけの給金を受け取る

然かし、一番可愛さうなのは內職業者だ、英國でも佛國でも自分の家でやるとなると、もうひどいもんだ、ブラウヅと云ふ上着、あれを一日に三枚や四枚位したところで、三十センツか四十センツかだ、膝掛を三ダース位仕上げたつて、わづかに八ソーヅにしかなりやしない、八ソーヅと云へば半ペンスだ、然かも三ダース仕上げるのには一寸十四五時も掛かるんだ、レースを編むんだつて一日八ソーヅ位のもの、こんな安い賃金の所へもつて來て、減額せられ追約せられて益々安い賃金になつてしまう、隣れぢやないか、あゝこれ等の窮困して貧苦にやつれ饑餓に迫られて常に戰々競々たる勞働者に一掬同情の淚なき者は全たく人ではない、あゝ勞働者はよく之れを忍んで居るよ

こゝに面白い比較、と云ふよりもいみぢしき對照すべきものがある、最も有名なベルシヤの服屋で、最も美麗なることを取り扱かつて居る一女敎師は、毎年、驚くぢやないか、拾萬フランク拾二萬フランクなんて云ふ大金をもらつて居る、

經濟上になると婦人で一日一フランク二十五センツ得る人で、餘程つゝまやかにしても、炭だ、家賃だ、衣類だ、食事だと云つてる中に皆無になつてしまふ、馬鈴薯あげ物一皿と時にスーセージの小片が食へれば寧ろ奢る方だ、だから病氣にでもならうもんなら、それこそ色々な悲しい憐い話しがすぐに出來てくるのである、

あゝ人世はいつまでも、斯くの如くにして、萬民のいづれもうれしく、平和なる時は永遠に來ないであらうか、名譽だとか、才だとか、美だとか、それ等が何だ、男子も女子も先づ沈思默考して、我が行くべき道を直くせよ、一方には可憐なる勞働者に多大の同情を寄せなければならぬ、又一方には此の社會に打ち勝つて、自己の立脚地を確くし、何者も懼れぬ魂を以て千萬の難關を破つて突進しなければならぬ、勇氣と忍耐と血と淚との生涯でなければならぬ、只熱誠を以て、

海內時事

關口大瀧の悲劇

▲堤上の母子　去る三日午前八時過小石川區關口水道町八番地百八屋商落合鐵次郎(四十)と云へるが高田老松町の花客へ用を聞きに赴く途中に同町大瀧堤上の欄の處に年頃三十前後の婦人が二三歲の子供を背負ひ六七歲の女の子供の手の甲を擦つゝ何か打語り居る樣子なりしが此の寒空に子供は足袋もなく定めて寒からんと心に思ひつゝ大凡そ一町程行過ぎたる頃俄然消魂しき子供の悲鳴と共に彼等の姿の見えずなりたるより若しやと思ひ取て返し堤上より水面を見守り居たるに突然目の先きに前記の婦人が子供を背負ひたるまゝ浮き上りたるにぞ大に驚きて大聲を揚げ救ひを呼びつゝ直に着衣を脫し水中に飛び込み浮上りたる死體を小腋に抱へ漸く岸に泳ぎ付きたり

▲漸く蘇生　折柄通りかゝりし洋服姿の紳士も力を合せ辛くも三人共に引き上げしに附近の人々も馳せ集り焚火にて暖め人工呼吸法を施し漸く蘇生したる折柄小石川署の淸水巡査が出勤の途中通りかゝり近隣の各慈善家より惠まれたる衣類と着替させ一同人力車に乘せて小石川署へ連れ行き取調べたり

▲婦人の素性　此婦人は小石川區柳町二十四番地平民大工職立石米吉(三十)の妻すゞ(三十)と云ふ者にて子供は兩人の間に擧げたる長女キン(七)長男保行(二)といふもの此の米吉と云へるは大工にて相應の賃銀は取り得るも何分一人の腕にて稼ぎたる賃銀のみにては暮し兼ねたるより去月十八日夫婦相談の上一時米吉は地方へ出稼ぎし其間だけ母子は牛込區簞笥町八番地スヾの實兄なる萬歲師鶴彩福太郎方へ預くる事になしたり

▲無慈悲の兄　然るに兄の福太郎は鬼の如き無慈悲の男なれば必ず心よく引受けてはくれまじとて米吉は同日柳町の家を疊むと同時に自身は福太郎方へ顏出しもせず何處ともなく出發したるがそれよりスヾは子供を連れて實兄福太郎方へ赴き前記の始末を話したるに福太郎は案の如く大に立腹し實母カヤ(六十)と共に口を極めて惡し樣に罵り出て行けがしに扱ひて三度の食事も與へざるにスヾは翌十九日より幼少の頃よりの友誼なる牛込區天神町加藤某方を始めとして自分の知れる限りは悉く經巡り厄介となり居りたるも何時迄も的もなく他人の處許り厄介になるも快よからずとて五日に一度七日に一度位は福太郎方へ赴きたるも相も變らず食事さへ與へずして追出たり(中略)

▲敎育院へ送る　斯くてスヾ親子三人は小石川署に於て取調べたる末兄福太郎へ引渡すべきを再び斯る事ありてはと直に小石川養育院へ送られ同院の離隔室に入院せしめ目下治療中なりと

諸戸家の結婚費

▲親戚の抗議　戸毎に黃金を實行きたる人にして一代に三千萬圓の巨產を遺せし伊勢桑名の富豪故諸戸清六翁が嫡男精太氏(二十)と名古屋市東萬町の太物商にして多額納稅者たる武山勘七氏妹さく子(二十)との華燭の典は既報の如く今回諸戸家に於て擧行せらるゝなるが故清六翁は古を忘るゝ能はずとて其質素なる事三重縣第一の富家にも似ざりしかば此婚儀に相應なる調度を行せず然れば同家の重役は大隈家より一切の道具を借受けんとし略は之に定まりし折柄諸戸家の親戚同苗清吉氏斯くと聞きて苟にも天下の富豪が人生の大禮たる婚儀を行ふに際し他より道具を借入れたりと有りては世間の笑を招きて故人が名をも汚す可し儉約も時にこそ依れと忠告せしかば重役等も漸く成程と合點が行くと共に大隈家の調度には悉く同家の定紋ありと聞き然れば更らに協議を改め結局結婚費として一萬八九千圓を支出して一切を新調するに決し若し殘餘あれば之を公共事業に寄附する事となりしが大禮の式は先年新に諸戸家邸內に建築せし「新御殿」七十五疊の大廣間に於て三重縣選出多額納稅者議員木村誓太郎氏夫妻が媒酌の下にいと嚴に執り行なはるゝ由なり

▲料理の變更　右の婚儀に就きて招待する賓客は大約五百人とし內一百人を四日に三百人を五日に分つ豫定なるが之にも倒質素を旨とし料理一人前五圓を出す可らずと定め之を花嫁御寮の里方なる武山家に通知したり斯くて其後に至り重役中の誰彼萬事を打合せん爲め武山家へ赴きたりしに同家にては一人前約八九圓の料理を以て饗應したるにぞ重役等は眉を寄せ「豫て當家より來客の馳走すら一人前五圓以下と御通知申上げしに只今我等に給はりし料理を拜見すれば先づ十圓程と思はる如何にや」と問ひ詰めたれど武山家にては「決してさる事なし飽く迄も質素を旨とする御通知には反き申さず」と答へて其場は兎にも角にも終りたり

▲結婚費增加　武山家より歸りし重役は斯くと他の人々に物語り先方にては此婚儀を華々しくせん心の程明かなれば當家に於ても之に副はざる可らずとて俄に來客の料理を一人前廿五圓と變更し婚儀費用を三万圓と改め扨てこそ諸戸家附近なる鍋屋堤の櫻樹一萬本に電燈一個宛を點火し桑名藝妓七十餘名を總揚げなどの議決したるなりとぞ(名古屋通信)

如上の事實は眞に現社會の欠陷を遺憾なく暴露せし對照にあらずや、一面斯かる悲慘の狀態に引きかへ他は前者を知らざる如くに萬金を投じて終生の祝儀にさて小數者の快感を滿さんとす人生の大禮斯くありては寧ろ猾稽にあらずや、ア、爰に至り四海同胞も何もあつたものでない、博愛宗に及ぶも何もあつたものでない、斯かる不權衡なる社會に安心して、生存なし得らるでしやうか、斯かる現社會を呪はずに居られましやうか、斯かる、冷血の人類に蹂躪せられて多情多恨の人間らしいものが不平なしに生存して居られましやうか吾々は眞に口先き斗りでなく、筆さき斗りでない、日常斯かる事實に觸れて、熱血を沸かして居るのに候、吾々は、世人が恰若無人の振舞を以て、社會主義の骨髓を誤解せる如き、斯かる輕忽浮薄の我利主義に非ず己れが勢力を敷延せんとて、他を陷穽せんとにも非ず、要は只々相互扶助の崇高なる道德を億兆の人に體得せしむるにあるのに候、吾々は何處までも、基督の愛に則り靈肉、共に安全娛樂の意義ある生活を人類一般に體得せん事を期せねばならぬと、眞に如上の矛盾極まる事實を見る每に一層其熱度は高まり申候

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

娼婦を憐れむ

芙花子

近時に至り、男女同權論盛んに唱導せられ、頑迷不靈なる舊慣の無意味なる踏襲に過ぎざる現代の家制度下に、奴隷の如く制縛せられて、毫も自由を有する事なき、蹂躙せられたる婦人の權威の爲めに、之が解放を呼ぶの聲漸やく高きを加へたり。新酒を古嚢に盛らんとする固陋の論者は、口を極めて之等の思潮を排斥し或は生理上の原理より、或は家族制度の關係より、百方辨難攻撃を試みつゝあり。而かもこれ、二千年來横暴なる男子の爲めに、非理性的なる制縛下に抑壓せられ、服從の外何物をも學ぶ能はざりし婦人が、一朝覺醒して「自我」の眞價を發見し、一齊に起つて横暴なる男子の前に、服從の理由を聞かんと欲する健々しき叫びなり。若しそれ反駁論者の根底より唯一の「習慣」を除き去らんか、剩すところは只曲解のみ、非難のみ、事實昨日の習慣を今日に繼承し、今日の狀態を明日に存續し、依然婦人を奴隷の境遇にあらしめて、之を侮辱し、玩弄し、酷使して、横暴の獸慾を不斷に擇はんとする卑劣なる根性を掩ふ假面のみ。見よ「婦人に參政權を與へよ」てふ痛烈なる婦人の正面よりの叫びに對して、男子は面を外向けつゝ「女は女らしかれ」と微かに呟くのみに非すや。

現代に於て婦人が男子の爲めに、奴隷的制縛を蒙りつゝあるはこゝに贅する迄もなし、蓋しその内にあつて、具象的に、個々的に、現前の事實として、尤も明瞭に這般の消息を物語れるものは娼婦の境遇也。彼等は獸慾の放散器と成られつゝ、朝に源姓を送り夕に平族を迎へ、日毎夜毎の仇枕に果敢なき夢をを結ばざる可らず。直截に曰はゞこれ即ち輪姦の公認に非ずして何ぞや。一度廓地に赴きたる者は、多くの娼婦が珠姫嬢として脫ゆきところ、紡績を飾りて売姿媚態を裝ほひ、満面に媚を湛へて駢列せるを見ん、これ即ち輪姦の對手者を待望しつゝあるに非ずして何ぞや。妓夫が聲を限りに嫖客を呼び止めつゝあるは、これ即ち輪姦の媒介者を慫慂推しつゝあるに非ずして何ぞや。慘たるこの光景を卒直に眞面目に諦觀したる者、誰か憮然として寒慄せざらんや。而して遊廓は即ち此等の罪惡を公行する魔殿也。迷宮也。あゝ習慣の久しきこの奇怪千萬なる現象をさへ社會は毫も怪しむ事をなさゞる也。

顧つて彼の娼婦の日常に於ける生活狀態は如何。昔日にあつては冷酷なる楼主より虐待を蒙むる事も又甚だしく、その飲食物の如きも、半殺又は豆腐殻、草猫の芽出し又は黄、粥を混じたる雑炊などを供給せらるゝ事一日僅かに一兩回にして、偶々遊客の歡心を損ねたる場合の如き、細引縄にて嚴しく手足を縛せられ、縄の先を鴨居の折釘に釣り上げ、竈口の類を以て所嫌はず打擲し、若くは、寒夜裸體のまゝ庭の樹に縛せられ、針の如く肌を刺す凍寒の裡に放置せらるゝなど、頗る苛辣なる呵責を受けたるものなりき。今日尚彼等社會に於て俗に稱せられつゝある「お茶挽き」は、遊客の登樓せざりし娼婦の爲めに罰として、終夜茶を挽かしめたるよりこの稱起れりと傳へらるゝに非ずや、推して以て全斑を知るべきのみ、爾後明治五年の解放令發布となり、更に去る三十三年十月自由廢業の公認となりてより、やゝ監禁制縛の程度を緩うするに至りたりと雖も自由廢業の如きも近時に至りては漸やく空法死律としてその實を擧ぐるなからんとし、娼婦の自由は依然奴隷的檢束の抑壓下にあり、抑も何が故に我等は斯かる奇怪なる現象を默過し遁がさる可らざるか、存娼論者は論じて曰く、若し遊廓を廢して娼婦を絶無ならしむる時は、徒らに私娼の數を加へ、密賣淫隨所に行はれ、延ひて恐るべき花柳病は社會全般に漫延し、姦通罪を犯すもの、處女の墮落せらるゝもの、擧けて數ふ可らざるに至らん。これ社會の風俗を紊亂するものにして、廢娼に依つて加はる弊害は、存娼の爲めに數へらるゝ弊害よりも遙かに大なり。故に遊廓は之を存置せざる可らず、娼婦は決して絶無ならしむ可らずと。若し果して之等の單純なる理由が存娼論者の根據なりとせば、徒らに枝葉の末に走りたる淺見にして、その根本に横はる兩性問題を遺忘したるものと云はざる可らず、然らば根本の兩性問題とは何ぞや。

元來今日の兩性關係は、虚妄なる道德律に縛ひられたる不自然至極のものにして、戀愛の自由は、不謹愼なる墮落と嘲られ、人間自然の本能なる性慾も又大なる罪惡なるかの如くに罵られ男女七歳にして席を同ふせずの偏狹なる幼稚なる男女交際觀が、依然正當なるものとして認められつゝある也。而して之に加ふるに強制的結婚あり。その結婚を強ひて存續せしむべき一夫一婦の縄墨律あり。これ恰かも人間の四肢を折り曲げて、窮屈なる鑄型箱に封禁しおるも同様のみ。見よ、相愛する兩性の抱合を禁じて不合意なる結婚を強ひ、相融合すべからざる兩個の分子を一所に結び附くるの結果、果然、失戀のなげきあり、煩悶の呻きあり、自暴自棄の亂行あり、延ひて姦通の罪惡あり、嫉妬の悲劇あり、夫は酒色を漁りこさらしき一時の快を他に貪ほり、婦は壇然の如く寂寥なる心の空虚を満さんとして姦通の罪を犯すに至たる。社會を挙げて淫猥の天地となし、而して之が風俗を紊亂しつゝあるものは蓋し虚妄なる道德律の強制によるものと云ふも決して不當に非ざるべし。

若しそれ今日の如き兩性關係を一變し、何等從來の慣習に拘泥なく、絶對に戀愛の門戸を解放し自在なる男女交際を獎推し、吾人は相互に愛人の人格性能に顯はれたる長所美點を認むるのみならず、同時に之が缺點短所をも知悉して倶に共に相扶けつゝその足らざるを補ひ、充分相愛の實を繼續し行くべき確信固熱したる後、始めて結婚を行はんか、これ眞に愛する者と愛する者との融合にして、完き結婚と云ふべき也。荒寥落寞なる人生の行程は、斯くて隨所に戀愛の百華爛熳として咲き匂ひ、結婚の果實を收めて、意味ある色彩に飾られなん。斯かる社會にあつては、故なく青年處女を隔離して自然の慾求を壓迫する事なく、父兄は自己の意志に任せて子弟の意嚮に背反せる結婚を强ゆる事なく、危險なる財婚なく、賣買婚なく、極めて完全に合意的に一夫一婦の制を守らずして守るに至るべし。かくても尙賣女の要ありや、娼婦、妓楼を存置せざる可らざる要ありや。

彼の存娼論者の第一に杞憂する花柳病の蔓延の如きは、畢竟、賣女制度――輪姦を公認する不埒千萬奇怪至極なる――の副產物にして、姦通強姦の如きは、虚妄なる道德倫理が、人間自然の性慾を罪惡視し、之を壓迫抑制せんとして却つて反撥を喚び起し、發してこゝに至れるものなる事上述の如し、見よ根本の兩性問題にして解決せられんか、存娼論者の駁論も、こゝに全く其の價値なきものとなり了するに非ずや。

要之、娼婦、妓樓の存置を必要とする社會は、明々地にその社會制度の病的なることを物語れるもの也、婦人の解放を叫ぶ者よ、廢娼論は頗る陳腐なるが如しと雖、これが實現を見ざる限りは依然として之を主張して、社會の一隅より此の醜婦の汚點を拭ひ去らざる可らず、婦人解放の第一要義は、即ち婦人の奴隷的好典型なる娼婦を全廢する事によつて始めて意味あるを得べし、もし、世上流俗の嘲罵と、遂行の困難なるとに怯避して、この奴隷的好典型を永久に存置せんか、婦人の解放は遂に行はるゝ時あらざる也。

病床雜讀（一）

曼加部生

「石川五右衛門」（塚原澁柿氏著）有り體にいへば、予は實に石川五右衛門に就いて、彼れは義俠心のある大強盜であつたが、終はりに「石川や」云々の辭世の歌を殘して、釜煮にされて仕まつたといふことの外、何んにも知る所はなかつたのだ。然るに今度隆文館から例の塚原澁柿氏の著として「石川五右衛門」が出たといふ廣告を見て、一讀したくて溜まらず、そこで早速由分社に取り次いで貰つて讀んだ。流石は歷史小說家の錚々たる塚原氏の著、材料、結構、文章に於いて、些の批難すべき所はないらしい。唯だ彼れは實に果たして「三百余年前の社會主義力行者」といふべきであるか。否かは別問題として、

姦臣を殺し、賊吏を誅し、義に依りて盜を爲し、盜を爲して民を安んず。日月の照らす所、神明の鑒る所、光明正大、平等利益。

といふ別辭を殘して茨坊主から大強盜に變ずる所、また終生飽くまで掠富救貧主義を以つて貫かんとする所、實にいゝ。唯だまだ前編のみしか發行されないので、二回ばかり大聖寺の例の主義を實行したばかり。彼れが生涯に於いて如何に貧民を救つたかを知ることの出來ないのを遺憾とする。彼れの師匠瑞泉禪師が、彼れが叔父や妻やの仇討ちとして筒井順慶を狙ひ討つて、彼れ自らも負傷した時、彼れを戒めた言葉がある。

嘗ておまへに何んといふたか、縱令ひ如何なる事があらうとも、この復讐以外の事で死んではならぬ、と、な。……その戒めを忘れて、高が一人の女子の爲に、大切な身をまで失はうとする。痴者ども、未練ども、汝の限りじやの…………

基督の所謂「凡そ我れに來たりて、その父母妻子兄弟姉妹また己れの生命をも憎む者に非ざれば、我が弟子となることを得ず、またその十字架を任はずして我れに從ふ者は、我が弟子と爲ることを得ず」と一ッだ。我が無政府主義者のよく聞いておくべき所と思ふ。

或る人は曰く、社會主義の理想に加へて、俠客の義俠心があつて、始めて眞の社會主義者となり得られるであらうといふたことがある。予も然かく思ふ。この意味に於いて、予は斯の書が多く世に讀まれん事を希望する。終はりに予は偏に一日も早やく出版されん事を希望して待つ。

（二月二十一日朝稿）

○偽善者よ天地の色彩を別つ事を知りて、此時を別ち能はざるは何ぞや（路加傳）

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

農家と理科（八）

増田操

去る秋の頃であつた京都文科大學の谷本松本の兩博士を始め其他の教授職員生徒五十餘名の一隊は盛んなる一大松茸狩りを催ふさんと某日京都府愛宕郡白川村字白川山に赴き互ひに己が獲物を誇らんと山又山を越へて狩り立て居たる折柄數千の熊蜂軍に襲撃せられ松本博士外十一名は數個所の螫傷を負ひて命からがら避難し敵の根據地たる巣窟に突貫したる學生三名は螫傷の爲に人事不省に陷りたりとか又福岡縣粕屋郡久原村下安河内彌一郎の奧座敷なる袋戸棚の中に昨年春頃より一群の熊蜂來りて巣を營み始め暫時の間に著しき大さとなりしかば家人は戸を閉ぢて其爲すが儘になせしところ昨秋に至り熊蜂の一群は遽かに巣を捨てゝ何處へか飛び去りたるにぞ家人は始めて戸を開らき巣を檢するに驚くべし高二尺六寸直徑二尺五寸の大さに及び其紋理の精巧美麗を極め而も一房の缺損もなく宛然釣鐘をブラ下げしが如き觀あるより人々今更の如くに奇異の思ひを爲したりとか新聞紙は報ぜりき、古來「泣き面を蜂が螫す」とか何とか彼とか蜂は皆な螫すものゝ如く怖はがつて居るが同屬總てが螫すものでない、熊蜂の如きは最も恐るべきものであるが蜂類の特性として雌は螫すものでない、同屬體軀の腹端には肛門及び交接器等あり且つ雌には産卵管がある種類に依つて其形狀が違ふ或は産卵管にして保護器を兼用するものもある彼の熊蜂の如きはそれであるこの管を通じて卵を産下し且つ其根部に一種の毒腺あり所謂人を螫す時は忽ち毒液を分泌して管に傳へ直に其傷痕に入るから吾人が中毒するのである、であるから雄は螫さないのだ一種寄生蜂の如きは其體も頗る小さく又他の蟲類に寄生するものなれば決して人をさゝないのは勿論であるそして、蜂は大抵十月十一月に發生して其の以前には殆んど發生しないから科學思想に幼稚なる農民が年から年中どんな蜂でも螫すと思ふも一應無理のない話だ、兎に角螫されて痛むは蟻酸（アルデヒート）と稱する毒液の中毒であるから其傷口へ安母尼亞水を滴らすが良い、又簡易療法として食鹽水にて洗ひ又「ヲトギリ草」の生汁を塗るもよい、この草は枝梗對生し高二三尺にして其の色赤く葉は綠色で狹く長く恰も檜の葉に似たり晩夏の頃、梢の間に單瓣五出の黄花を開きて莢を結ぶ又能く金瘡を治すとも云ふ其昔花山帝の頃鷹飼の名人に晴頼と云ふものがあつた此草を鷹の傷を醫する秘藥とせしに其弟某が他に洩らせしに依り晴頼怒つて弟を斬る因つて弟切草と稱せるとか記して參考として置く。

蜂類は常に樹間にあるのみならず夏時梨の實は指頭大の頃より多く地に落下するものであるが恰もこの頃は蜂が果邊を彷徨するものであるから農家がこれを見て直にアヽ折角結實したる梨の今年は／＼と丹誠を盡したものを惜ひかな又蜂にやられたとは農家爐邊の茶話として往々聞く小言である、其落るは生理上或る障礙に依るものもあれども多くは蜂の所爲でない、イデ辯護して蜂の寃枉を雪ひで見ましやふよ梨樹の開花に先ち一小甲虫が來る、體長三四分紫紺色で頭部は細長く少し曲りて恰も象の鼻に似て居るから「梨の象鼻蟲」と云ふ、花謝し實を結ぶや幼果を嚙み其傷痕に一個づゝ卵を産み付け同時に果柄の或る部分を嚙み傷くその巧妙なる卵を孵化して幼蟲となり果肉を食し其果の大なるに從ひこの蟲も漸く成長す一年一回の發生にして幼蟲の儘、土中に於て越冬せねばならぬから彼の土中に入るの便を求めしめんが爲め斯く果柄を傷け置くとは何と驚くべきではないか其生理を害するに依り往々落下するのである梨の成熟を缺せば象鼻蟲を驅除するも一法である、幸ひに累累たる其果の成熟すれば又其果邊に蜂の多く群集するを見る吾人これを味はんとし手に採つて外皮を檢すれば豈に圖らん大にして如何にも甘まさうなる其果の或る部分の變色して一の斑點を印するの異狀を認む既に庖丁を以て裁斷すれば其部分の果肉腐敗してまた食するに足らず、ア、また採收の期を過したから蜂に吸はれて、「罨す」（腐敗したる一種の方言）が入つたと託つて居るこれ又外觀上暗黑色の斑點を印するものは或る病菌の寄生に因るものもあれども其果肉の腐敗したるは他に原因がある「アケビノテウ」などゝ云ふ一種の蟲類の被害にして蜂の被害でない、この害蟲は比較的強剛なる口器があつて而も細長くして恰も針の如く靜止のときは螺旋狀に卷縮しあれども熟したる果面に接すれば口部を細長にし果肉に差し込み以て其液汁を吸收してこれが營養とするのである、だから斑點を印する變色部に注意してこれを檢すれば針で印したる如き微孔がある一たびこれを吸收するや其傷痕より外氣の襲ふ所となり漸く腐敗するのである、そして彼が夜間に吸收し晝間は去つて地に委したる枯葉の間に隱れて能く靜止す其翅頗る強よけれども其形能く枯葉に似て居るから「枯葉蝶」とも云ふのである、一たび隱るゝや枯葉に擬して一寸見出し得ないのみならず夜間に害するから農家が注目を怠るも蜂は又これに反して晝間に群がり果面の傷痕より滲出しつゝある果液を甜つて居る、そこで蜂の被害だと誤認して居るのであらう余幼年時代の穀物語りに、「米を盜る盜人は捕らへられずして糠を食ふ犬か捕へらる」と祖父から聞いたことであつたが蜂もそうである思へばこれは現代の紳士閥を諷したもので白晝公然、巡査に立番をさして賭博詐欺盜賊を行らかしながら平民階級の小盜は容赦なく捕らへられ常に平民を苦むるなど不合理なことを行つて居る、これが有難い法律の結果だそうな、其法律なるものは一方から見ればどうも紳士閥の都合のよいやうに出來てあるやうだ、それに法律は死物で活用如何にあるのだと云つて居る、勿論法律には貧富の差別がないが常に紳士閥の爲に御都合のよき樣活動して平民の爲には見て見ぬ風をするから詮方がない、露骨に云へば法律の活用は紳士閥の御機嫌を取る樣で警察でも何時も其手先きとなつて居るらしい、頃日新聞紙は傳へて曰く松方伯今は鎌倉の別莊にあり朝に瓜の蔓を摘み夕に茄子を培ふ一夜小盜あり茄子を取り去る伯、大ひに怒りて狀を鎌倉警察に訴ふ、警察署長恐縮して其部下を派し畑を守らしむるもの一週たりしと、伯の財產にして茄子一個は何故左程貴きや、伯の地位にして茄子一個何故左程憤怒せしや、如何に警察署長をして恐縮せしむる價ありしや、一方から見れば彼等は只營利を營むを知つて他を思はず老猾の狡才眞に憎むべく彼等は人間藏する所の總ての力の貯藏を賊するものと思ふて居る、この意味よりして余等は富者が權位を擁して平民を抑壓するを惡むと共に奴隸的境涯に甘んずる同胞を鞭撻せねばならぬ、靈ある人間は到底この屈辱に堪ゆることが出來ぬ、自由の權利を渴仰せる同志よ、憐れなる同胞よ、不義者と戰ひ、抑壓より脱する自覺がないとは去りとは餘り情けなき次第ならずやその誤謬、かの慘害に惱む、未だ眞理の光明を味はないからである、蜂の辯護も知らず／＼長くなりましたが梨を栽培する農家諸君よ敵の本能寺は蜂にあらずして他の蟲類にあり害蟲驅除を欲せば宜しく科學思想を發達せよア、事理の誤解實に怖いものですよ。

古來農家は雪を喜ひこれが多少は年の豐凶をトするものとし冬季積雪の多きは豐稔の前兆なりと云へり其利害如何或は前年に降雪多ければ害蟲の多くは滅亡するが故に其年の收穫豐饒なるに因ると論するものあれども雪が降れば寒いから害蟲の多くはこれが爲に死すとは果して然うであらうか否々寧ろ研究すべき價値があるであらう降雪の積りし下は雪のない地より溫度は高くこそあれ低くはない、聞く某の觀測に依れば一月中旬の午前七時に於て氣溫が零下三、八度の時に雪の下は零下二度に過ぎなかつたことがあると云ふ、これ雪や氷は比較的熱の不良導體であつてそれが爲めに地熱の發散を避るが故にこれを以て覆はれてある下の溫度は勢ひ高からざるを得ないだらう假令左なくとも寒氣が酷しき爲め蟄伏せる害蟲は凍死するであらうなどゝは隨分疑はしき事實である、害蟲の種類も甚だ多く幼蟲の態にて越冬するもあれば蛹若くは卵の儘存するものも少なくない、中にも幼蟲の體軀は最も軟弱であらうそれでさへ中々寒氣に抵抗する力の强いものである況んやそれより强き蛹若くは卵に於ては容易に死滅するものでない例へば土中に於て寒を凌ぐべき蛹若くは幼蟲の類は大抵土房を營み其内面を平滑に磨きて水濕の侵入を豫防しあるものにて其房中に安在する間は如何なる寒威にも耐ゆるの力がある若しこれが土房を破壞して外氣に暴露し凍融交到の災に遇はしむるに於ては或は斃死するに至らんも然らざる以上は冬季の低溫が害蟲驅除の上に左程の關係がないだらうと思ふ、又積雪の爲め空氣と日光とを遮ぎり殊に其雪の表面融解して凍結する時は空氣の流通全く其途を絕たるゝが故に作物の窒息して枯死することあり或は土地濕潤にして溫度較々高き時に當りて積雪するあれば作物腐死し易く或は積雪の融解し始むるや融水相集りて土壤を蕩滌することもある

斯く陳べ來れば作物に對する積雪の効用全くないであうか其利とする處は只僅かに雨水と同じく雪には窒素化合物含有すれども其含量又僅少にして云ふに足らない、又雪の如き地表の覆蓋となりて地溫の低下を防ぎ及び其變動を抑き土壤を鎭壓して麥の如き幼根を靜定するの効あるべしと雖ども未だこれを以て其年の豐凶をトせんとは到底お話にならない、只冬季に降雪の多きは又翌年の氣候順當なるべき前兆なるべきや否は一つ考ふべきものであらう、されど農家は栽培する作物の凍傷如何を講究せねばならぬ、總て物體は熱に逢へば膨脹し寒冷に遇へば收縮するものである、外氣寒冷なれば植物にも害を及ぼすものにして其液汁に富める部分は氷結すれは氷晶を生ずるが爲に脆弱となり寒冷の度を增すに從つて漸く硬固となり組織を崩壞し細胞は水分を失ひて多少收縮し其氷晶は又漸次增長するものにして細胞液の有色なる場合にも尙ほ無色にて殆んど純粹の水より成る水幹及び葉柄にありては氷晶は先づ上皮の直下に生じ表皮と外皮の間を分離せしめ甚だしきは其壓力にて裂紋を生じ爲に樹皮に傷痍を認むるに至る。

（未完）

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

小說 握手！

孤舟

上

「實さん握手して下さい！」落葉は蕭々として堆積し檉杉の常磐木は冬枯れ乍らに鬱々として空を蔽ひ晝猶ほ狐狸の荒るに任せたる寒村の村はずれ一段高く見上ぐる宮山の麓、赫土を拓いて石段斜めに長く／＼築き上げたる八重村の鎮守八幡社、拜殿の左側…下の小道を稀れに山畑の耕作に通ふ人の目も屆かぬ一大老杉の木蔭に身を寄せたる智佐子は、何か追ひかくる者やある？と思はるゝ計り、さしも性急に歩みつゝあるかの如く而も其心は早や既に燒て爛れて硫黄の火の山を抱く氣配もて…微かに囁きぬ而も其懷へたる聲や熱き／＼情火の光り奇しくも强く…晩秋の氣克く人を愁殺す此寂寥の景に憧がれて寧ろ荒凉を好む實は往昔少年時代此村の小學校に學びゐ倶に遊びゐ倶に手を携へて睦びし智佐子幼なふにも友達の陰口や出し拔けの嘲笑に面恥かしき優しの心は眞紅に燒いて憫かなる可愛き頰を燒しも幾そ度、人に後指差さるゝを憚りてにか其後は包めば包む程内に悶々燃ゆる火は所詮優しき胸の掻き消すべくもあらず、片言交りの假名文字も彼所に此所に拔け落ちて辛らく判じての拾ひ讀み幾多の友が目を盜んでソト智佐子が袂に入れしも幾度ぞ始業の鐘に慌てゝ席に着き授業の用具出さんため何心なく蓋明けし机の中に何とはなしに只管に思はるゝ忘れ難たなの智佐子の返し穢れて皺多き半紙を四つに其可憐、昏の唾もて千切りし紙切れに赤き心を其儘に…嬉しと思ふ、その殺那並びの友に奪はれてツイ先生の教卓に…若き教師の膽を焦り當て摩すられし事もあり、かくて逝く年月に關守のなく實は其翌春、此小學校を卒へて親の誅めに…兄の勸めに……いや／＼乍ら六七里山を下りし海濱の一小都、吉見町そこの縣立中學に入りぬ、而も生來、餘り好まぬ學びの業に其身を立つるの心もなければ成績とても優れず益々不快の心機は急轉直下して始めての學年試驗終りも敢えず退きぬ、斯くて幾年の農耕に、四圍蜿蜒起伏して長蛇の如、峰走り嶺横はりて山嶽陵夷、淺霧、深く鎖ざして宮山の眠り紫に明け行く曉には、千古の夢を纏めたるその面に…奈何の笑みや浮びし、彼れ實は此間に俯仰して自然と語り天然と交る、縱令未だ曾て彫管の士となりて其美を謳はざりしとするも豈に生ける靈化に冥合の深きを示さゞらんや無聲に聞き無形に觀る直覺の性は是れ實に神與の賜なり誰れか花鳥の詩人のみ特り天地を解釋し得ると謂はんや……生れて將さに二十歳、彼れが强健偉壯なる體軀は召されて世にも有難き？近衛の騎兵と徴されぬ！

中

今日は彼岸のお中日、大きな藁苴きの智佐子が農家には猫の子一疋も居ぬ、皆んな打連れてのお寺詣り眞宗一向派の唯、何んとはなしに齋僧の呻る聲辨、其一ト口毎に滿堂の所謂善男善女てふ此僻村の總數三百頭の愚夫愚婦は只一齊に南無阿彌陀佛々々々々と低頭す恰も夏の夜風の生ひ茂る稻葉を吹いて青波、打渡す樣、若春の日永、生温き花曇り山岳重疊、擂鉢の底みたいな八重の孤村はまだ冬枯れの萠え出でゝ蒸する色も香もなく裏寒き儘…何とはなしに或るものゝ氣になり彼女兒智佐子はソト拔け出でゝ家に皈りぬ、君や居ますと徘徊たりし實を招じて只二人、幼な心に靜れ羞ぢらなの容赦なく心の丈けを思ひの儘を語りつ…聞きつ…初戀ひの聖き睦びの相見ては微笑む時の束の間は彼の海飛ぶ心地やしけむ！　智佐子亦此村の小學を卒へたる年の暮、可愛き子には旅をさせろ…の筆法もてツイ隣村の或る吝な縁者の許に行儀、見習ひの仕付けとして……天性聰慧な彼れは克已、能く立働きぬ、寒威凛冽、身を切る晨にも疾く起き出でゝ…小さき柔かな辻尖りの白魚の如き其小指は水仕の激しさに鮮血にまみれて皹と切れたる双の纖手を暖む暇もなき迄！少年過勞の果ては「角を矯めて牛を殺す」と誠、哀れや吳竹の春彌生、咲き愛の光りに咲き初めし智佐子か戀の花、可惜無慘の凶風は優しき清き眞紅の花瓣、意地惡くも吹き千切つて泥土に委しぬ！然り彼れは恐ろしき慢性僂摩質斯を病んで座骨の痛傷やるせなく苦吟煩轉、惡魔の神にまいなまる！　双親の憂慮や如何に！　彷々地主發展の覊絆を脫せんために…一家を擧けて實が一度餘儀なく笈を負ひたる吉見町に移轉しつ、專念智佐子の療癒に…燒野の雉子夜の鶴、子故の親の苦勞ば寢食も忘れて百方躊念の効ありてにか双脚不屈の跛者となりしも而も沈痛、耐えざりし痛みはこれぬ、「色の白きは七難を隱す」とかや青春幾多、病床に悲後の花顏は衰後の生ひ立ちに更らに一段の美を加へて錦上更に花を添えぬ、折しも所用に旅せる實の主と垣間、相見し智佐子は其瞬間、異樣の光り奇しき力の視線は無線電信の樣、不可思議の感應を與へぬ果然、或樣の氣　呵に打たれぬ！徒らに燒く如き念ひに焦けて身の不遇をかこちては、同病相憐むの赤誠は、やがて幾萬愛々たる姉妹の、より以上の悲慘事に香轉悶死するを見ては、生きて果敢なき我を沒して姉妹覺醒のため起つて犧牲たるべく俊夫に聞きて…爾來師と敬しつ兄と慕ひつ…理想に耽ろ小說よりも尚ほ奇にして艶なる俊夫が意中の戀人に絕えず激ける滑滑なる血涙と渾身の精氣を傾倒し盡して人道蒼生のために捧ぐる聖靈に結合の…けに崇高嚴度の神化に！一入、實の忍ばれて……

下

實は現役三年に引續き日露の役に繋がれて血河屍山を奔狂なしつゝ、六年振りにして、瞬く暇も思念去らざる呱々の聲を擧けたる幼な馴染の印象、深かき濃き歷史繰るべく故山の人とはなりぬ、彼れや此戰國の軍國に時めく軍士として胸間燦たる金鵄なく肩に輝く星章なな形骸計りの近衛騎兵けに鄕里に飾る錦なく一貫布衣の見すほらしさ、これぞ實が實たる所以の然り眞人としての一大榮譽、若しそれ人の笑はゞ嘲るに任せよ、彼れ故園を引き離されて都門の紅塵、兵舍の裡に將た又、展望廣漠、雲煙乎、積翠乎只見る高黍、果てしなく胡砂、洋渺たる朔北の荒原、草を褥の露營の夢にまで！そが高貴なる生命の破壞に强いられし身の、早く父を喪ふて今は只慈眼愛膓なる母の懷に暖かく其打壞されし生命を恢復すべく絹糸の細くも强く堅き一縷の希望も仇なれや！經濟組織の配下に…慣習の恐ろしき勉めて緣者の由因求めて愛なき婦人と婚すべくあはれ死せる形骸相擁すべく攻め立てられぬ！おゝ彼れが否運や蓋し思ひ半ばを過ぎん？實は怫然又嚴乎として謂らく「子は親の財産器具に非ず思想の自由は絕對也恩義を混同すべからず彼れ眞綿もて人の子の首を締むるは卑怯也、陰險也、陋拙也、愚劣也、叱！生きて愛の使命を完ふする能はずんば人生、畢竟何爲者ぞ寧ろ憤死の安きに如かず喝！」と實は憤然激昂、斷々乎として之を退けぬ、然れども吁！然れども…親の意に背くは不幸の子として里閭に幽するを許まず加之ならず愛の化身たるべき慈母すら夜叉の如く今は所詮此身を措くに所なし」と蹶然飛んで、猛虎嘯く韓國の禿山、深く分け入りぬ、爾來、杳として詳細、知るに由なきも時に觸れ折に臨みて「健在也」との只此三文字、載せて一葉の卷紙、尚は克く其母を慰安すとかや彼れ母國を辭するに當り智佐子が其後の動靜を焦心苦慮し追懷惑々として紅涙、滂沱やまざりしといふ。誠や俊夫の感流を汲んで姉妹の覺醒に獻身の淒榮は神の外、知る人もなく君實を戀ふる智佐子が胸の靑草は夢路にさへも生ひ茂るなり、けに實の堅き／＼そして久しき長き握手は、おゝ此一事よく君智佐子と相見る瞬間の燃ゆる思ひを盡しける哉

さらば卿等榮光に！此神聖き戀を生命に！

いざ幸さく永久に！靈へ……靈へ……（完）

△戀すてに孕みて、罪をうみ、罪すでに成りて死を生む（雅各書）

△わが兄弟よ、人自ら信仰ありと言ひて、若し行なくば何の益あらんや、其信仰いかで彼を救ひ得んや（同上）

◎萬象呻吟！！

舟木生

冬の夜の月限なく冴えて、
　金龍斜めに躍る石見灘
斷崖屹立颯と切る
　潮吹く嵐雪交ぜて
白砂たばしる松が枝に
　鬼風凄々………
怒濤逆卷く海神の雄叫び
　松籟啾々森羅嘯く
塵僞偽善の魁儡を廓滅すべく、
　吹けよ！降れよ！石の子飛べよ！

○

我が庭に來よ／＼雀雪の朝

孤舟

戀なれど

溪水

あはれと人は聞き給ふ

戀なれど、悲し、誰れを恨みん
あてもなく呼べど應へず、片思ひ、
人里遠み、闇深み、大野に、はた、深山に、
たゞ二人あらましかばと念ふなり、

戀するは罪乎、
やめよと人はつけ給ふ、

戀なれど、つらし、誠たらねば——
厭はれなば、くるし、後の日をいかにせん——
云ひ寄らんすべだになくて、闇へ泣き、
あゝされど、我れは世に生れなくとも、
はづかしきばかり戀しかるべし、
生れしが幸か、生れざりしが幸か知らじ、
かの君とともとならでは死ぬるとも、
執のくさりは絕えじつきせじ——、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

愛

二葉亭譯

嗚呼是れ波蘭の文士アンドレイ、ネモエフスキイの散文詩である。國亡びて山河在りとか、故國の田園を眺望して滿腔の感懷を歎つたものが即ち此「愛」の一篇である。波蘭の友ピルスーツキイ遠く此篇を予に寄せて譯して日本の志士仁人に示せと云ふ。原文に金玉の響あり、予の文の才は拙くして其十が一をも傳へ得ぬけれど、之を以て友の依頼に負くに忍びぬ。卒爾として筆を呵して飜譯すること數次、雖貴徒らに紙に滿つるのみで意に滿たぬ節のみ多いながら、姑らく愛に未定稿のまゝを載せて敢て大方の一讀を煩はす。

しめやかな、いつまでも／＼懷かしい短かい歌のやうに、幼い時は過ぎ去つたけれど、今其調を捉へんとすれば、もう捉へられぬ。唯愛事繁き我生の一角に時々其斷續する節を聞くのみだ。

之を聞いて、懷かしさに聲を揚げたのも最う幾度にかなる。幼い時こそ私も幸福も一體であつた。私が體なら、幸福は其體を活かす魂であつた。

その幼い時も過ぎ去つて、我身を照らす春の日影は消え我胸に秘めた幸福も奪はれた。他人の中に他人と育つ身は、そこらの少年が活氣に充ちつゝ、自由の天地に嬉々として此生を樂しむのを見ても、顔に顯はすは唯輕蔑の二字「已はこいつらとは違ふ」あゝ、こんなことをぶつて自ら慰めた事もある。

やがて青年になつて、此年頃に人の始めて知る程の事を知り盡したか、饑寒、窮乏、腸を絞る愁苦の味、獻身義を成すの心、さては恥辱を忍ぶ情けなさなど、皆知らでもの事ばかりであつた。青春の血はサタンの如し。浮世の歡樂と苦痛の岐るゝ所以の途に臨みては、靡ろに心を動かした事も有つたけれど、私は一喝して此弱い心を斥けて、一筋に直な道を歩み、志を同うする人々と共に、甘じて世の笑ひ草となつた。

賊の如く足音を偸んで來つて人に寄るものは年波である。いつしか私も中年になつた。中年の大人びた心になつては、自ら我智慧の淺墓であつたことを悔ひ、我と我面に唾して、此身を百の義務の軛に繋いで了つた。もう斯うなつては何事も決定して猶疑する餘地がない代り、前途に希望もなく、疲れ果てた心は冷時にも冷殺せられず、熱時にも熱殺せられぬ。記憶は寒灰に化し、過去を偲ぶ心も失せ、只當面の重荷を雙肩に負はされて、背も撓はんばかりであるが何物か來つて耳に囁く聲を聞けば、汝は壯夫だ忍耐せよといふ。あゝ、これは私を勵ます聲か抑も私を嘲る聲か？

寐苦しい一夜を明して、今朝は氣分も勝れない。鏡に對して髮を梳れば、櫛の齒に絡まる數莖の白髮。――あゝ、もう白髮が生えたさうなまだ男盛りと謂はれる身だのに……

今から斯うでは、年を取つたら如何なる事であらう？

誰が爲のこの辛苦？矢猛心に身を揉みあせつて贏ち得た所か、今の若さに此白髮だ。何しにあわてゝ老に就くのか？

眼を放つて野を眺め樹を見渡せば、あゝ、皆、しかし、この爲だと、私はこれが愛しくてならぬ。と、絶えて久しい、忘れたやうになつてゐた、遠い／＼昔の調、戀しい、懷かしい昔のやうな、幸福の光ち滿ちた調が微かに心の底で聞えた……

この聲こそは逝いて幾十年になる幼い時が木魂となつて響く聲である。

が、幼い時には今のやうに斯う此國土を愛しいとは思はなかつた。何故であらう？

今の愛しさは幼い時のそれとは違ふ。今のは幸福の聲ではない、止むに止まれぬ運命で、心の化石にならぬ者ならば、誰でも揚げざることを得ずして皆揚げる聲である。よしや、愛しいといふその聲が即て死の宣告となり、身首處を殊にして魂魄永く滅無に歸さうとも、誰か敢て此聲を揚げぬ者があらうぞ。

小説「男」

渓水

私の友人に吉田といふ男がある、近頃好きな煙草を止めて、それだけを貯金し、貧民に施すといふので、人にもすゝめ、自分は非常な勢でマア一月ばかりを經た、ところがある日、いつか外套のポッケットに入れわすれて居たシガレットが、たゞの一本あつたのを、はて試みだ喫つて見やう、キット味まで變つてるにちがいないと思つて一口やつて見た、一旦は人が側で煙草を吹いてるを見てさへ、實にイヤチ／＼たまらなかつたのが此の時ばかりは、嘗て思つたこともない程甘かつた、そして誓は破れてしまつた、一時も煙草を手放すことが出來なくなつてしまつた、すゝめられて一時止めて居た連中も或は三日、或は一週間で元通りになつてしまつた、中に一人、此の誓を守つて、ソウ一生涯煙草はのまんといつて、威張つてる人があるさうだ、止めない方があたり前なのか、止めた方が偉いのか、一寸わからん、

私にもよくこれに似た經驗がある、私は一時色と酒とに溺れて種々な失敗を重ねた、これではならぬと氣がついて女と酒とを嚴禁した、なる程一年が間は共に絶つことが出來た、が、絶つ事が出來たといふばかりで、女の情け酒の味を忘れ得たといふのではなかつた。

素より役所の仕事が面白い筈はないのだが、其の後は仕事にグッと身が入つて、思はず勉強も出來た、其の一年間は、私のためには餘程好運な時であつて、私は官一級を昇進し、俸給も増し、なまづの樣な髭が二三分も伸びて色も大分濃くなつた、昔しの遊び友だちは、始終出入りして居たが、心ではあまり好かなかつた、其の中にいろ／＼結婚の申込みなどが來る、女から直接に戀文など給はる、愈々外見堅く、身内つゝましく、友人間からは「アンマリ」だと非難までせられる樣になつた、「彼奴はいかにも冷酷になつた」と怒る奴かあれば、「大行情は無情の如し、今に見給へ」などゝ皮肉をいふ者が出て來る、が私はそんな事には一寸も相手になるもんか、常に自制の貴き事を觀念して、コツ／＼やつてる中に、國から私の叔母にあたる人がやつて來た、私の叔母さんと云つたつて、私よりか二ツも下なんだ、それでも叔母さんにちがひない、私の父から三番目の妹なんだもの、

三月の終りに上京して、別に確かな知人もなかつたので、一時私と一所の下宿に居た、今度女子大學へ入學する人だ、私なんかより學者になるだらうと思へば、嫉ましくも感じたが、それは親切な、やさしい、私の父と同じ樣に氣の弱い女だつた、ところがこれが友人間の大評判になつた、私が何だかエタイの知れない田舍娘を呼び寄せて、一所に居るがどうもおかしいと云ふわけなんだ、

馬鹿／＼しい、人をツケと思つたが、捨てゝこれちや大變だ、早速どうかしなけりや、御髮はれるばかりだと思ふと、叔母を見る度毎、いや、一所に居ると思ふだけでも、いやアな氣がして何だか後ろめたくてしようがない、さうかといつて、こんなやさしい叔母を大切に思はぬと云ふのではなく、何だか自分でわからないんだ、此の時位人間て奴がキタナク、ツマラナク見えたことがない、自分で自分がいやになつちやつた、反對に女の情けの好ましい樣な深い同情に富んで居る樣な、手厚い誠が、そほと觸れて、私しはほんとに女といふものを知つた、張りつめた意氣が伸びかゝつてる所へ、無邪氣な、温かい女の情けをあびて、やつぱり女といふものは貴いものと思ひ込んだ、

なる程、女は考へが淺いかも知れない、思想が薄弱かも知れない、立ち場が不定かも知れない、虚僞虚榮に満ち充ちてるかも知れない、でも女はやつぱりやさしいもんだ、女はちきに憤る、ちきに感情を外に表はすが、至つて無邪氣なものさ、第一世人の女に求めるものがちがつてる、やれ現代の女には思想がないの、やれ女は意志が弱いの、やれ女は迷信的だのさ、馬鹿ばつかり云つてら、私は女と云ふものを心から知つた、男らしき男子の友だちには、好いた女が一番の相手だ。

四月になつて叔母さんは學校の寄宿舍へ入つてしまつたが、時々手紙をよこしたり、遊びに來たりする。

其の後私は、ほんとに女好きになつてしまつた、酒はやらないが、女のおなじみは澤山出來た。

結婚はまだ中々せんつもりだ、役所の仕事にもせいが出る。

（完）

婦人問題　偶感

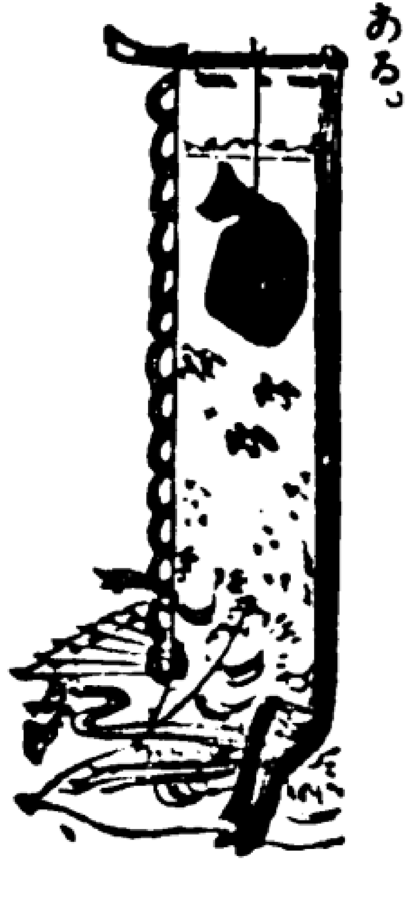
草田命作

▲暴横限りなき男子の手から、茲に全く婦人の解放を期するには、無論婦人自身が眞に覺醒一番、蹶起努力する所があらねばならぬ。

▲が、今假に當今の女子に對つて「今の婦人は古の奴隷と其性質、其境遇に於て何等の差異をも認めない。純然たる奴隷だ。否奴隷はアレでもまだ人間らしい所があつた。けれども現今の婦人に至つては、斷じて人間では無い。單に子を孕む器械だ。男子の小便壺だ。肉蒲團だ。」とでも云つて見給へ。妙齡の婦人は云はでものこと、腰に梓のお婆さん迄もがソレこそ躍氣となりて論者に喰つてかゝるに違ひない。そして一向に御自分の地位、境遇を顧ようともなさらない日本婦人二千萬、比々皆然りである。嗚。之を見るにつけても、予は婦人問題の前途の遼遠を思うて、轉た慨嘆を禁じ得ないのである。

▲婦人の歡心を得つゝ、婦人問題の運動に盡す男子が多い間は、婦人の解放は到底望まれ無い若し婦人にして、其解放を男子の力に待て居るものがあるとすれば、それは太なる考え違へと言はねばならぬ。

抑々婦人の解放てふ事は、茲に改めて說くまでもなく、全然婦人問題に屬する。婦人問題は婦人の手に依つて、始めて解決さるべきものである。



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

新紀元晩餐會

曙

雲よりこ霞に包まれた日である。夕方、戸山原を彷徨ながら大久保を通つて角筈の森を目標に歩いた。家々の軒には國旗が靡ついて居る。今日は紀元節だ。

福田さんの宅へ着いた時は未だ夕陽が殘つて居た。坊ちやん方の仲間入りして球投げをしたのは面白かつた。要君は椽先でバイロンの肖像畫を模寫して完爾して居る。

日は暮れた。最早六時だのに誰も來ない。こ思つて居る間に小野君が來た。福田さんこ三人で雜談しながら皆を待つ。今日は妾が出獄してから二十年目の紀念日ですこ、女史は懷舊の腕を抑へて種々こ語られた。何こなく興味の深い晩である。

暫時するこ、日暮里の面々が遣つて來た。木下さんを始め、逸見、柴田君等は尻摘げで中々の元氣。次いで藤井君等も來た。他に新顔の人々も在つた。斯んなに皆揃つたのは稀だこ云ふので、皆莞爾して居る。安部先生は風邪の爲めに來られ無かつた。意外に多かつたので福田さんは俄に膳拵を變更して大急ぎの御容子である。火鉢の傍では石香君が「中央公論」の「古猫」こ云ふ新體詩を讀んで笑つて居た。逸見君は、今晩來る時に日比谷公園で市民大會の後騷動が在つたので、僕等の乘つた電車の硝子窓が毀されて居たこ云ふ。其れが又た妙で、硝子が丸く穴あいて、石の形通りだこ言つた。では、餘程石を鋭く投げたんだらう、こ言つたのは誰だれたか忘れた。

何時の間にか食卓が整つた。珍しい鳥飯である。皆急々こ箸を採つた。菜食黨の柴田君は例の通り手持ち無沙汰で別室へこ云ふ次第だ。「君は未だ一人前の人間に爲れ無いかね」こ飯を銜んだ石香名が完爾する。皆な笑ひ出した。柴田君は苦しさうな辯解をして、暮處の方へすご〳〵逃げ込んで了つた。

食後、「靈か肉か」の批評が始まつた。

私が其の感想を述べて見た。其の要領は、叙景の佳いこ思つたのは前篇の書き出し振で伊香保で信夫が保養中の處。人物の性格の善く描かれて居たのが青年畫家の三郎。其れから看護婦の小川。會話の可いこ思つたのは又男の繼母お雪こ信夫が千歳での話。此れは表面上の會話よりも其のバックこ成る二人の境遇が會話の裏に潛む消息を穿つて居る。其れから自分の注文を云ふこ、信夫こ大村こが戀に陷る徑路を今少し細密に叙して貰ひたかつた事。二人の性格が今少し明瞭に表はして貰ひたい事。作物全體の上から云つて、構想が餘り過ぎて、筋書き體のものこなつた事。餘りに主義を表面に現はし過ぎた事、等である。

然し此んな注文は眞目兒の駄々に類するもの先衆の作物を批評する等こは思ひもよらぬ事である。今日の如き一夜漬けの短篇が亂出する時に當つて、斯の如き長篇に苦心の筆を染められた著者に我々は滿腔の感謝を述べる次第である。

他の諸君の感想が種々話題に上る事こ思つて居たが、石香君より、他は默して云はず、夜は追々に更けた。又の日を約して散會したのは十時に間も無い頃。日暮里の先生達は例の摘け姿で歸る。私等は中途で別れた。今晩は月が佳い、犬が寂しく泣いて居た。

靈乎否乎

グラ〳〵生

「御隣りの御客さん、昨夜はウマクやりましたネー」

「ナアー仕方なしですァ」

御隣りの客こ一ツ措いて御隣りこの話し聲だ

「拘留を出すから行つて呉れッてんじあ仕方がありまんやネ」

「ソーですか、私ア又ひごい目に會ッちャッた昨夜はチットも寢すですぜ……驚きやしたぜ、一體アノ若いのは何物です？」

「女學生だッてんですかネ、東京からの御馴染だソーで」

「ヘッヘエー ソーですかい、ベラ棒な所を聞かせ付けられたので……今朝四時を打つまでゞすからネ、御蔭んなのにも驚いちャッた」

聞いて居る積りでもない氣にする積りでも勿論ないが無遠慮なエーテルの波動はドシ〳〵僕の鼓膜をたゝくのだ。

「昨夜は何所です ◎◎ですか△△ですか？ハハア○○ですッて、あすこには▲▲てのが居ませう、梯子を上ッて右手の二番目の室でさア」

「エ、其の▲▲てのでしこ」

「エッ？▲▲ですッて、ヘッヘエー」

「御馴染でしたかネ」

「エ、去年中ネ……あの女が情の厚い女でしてネ、あいつの爲めにや私しも弱ッた事がありましたよ。

僕は或る解決を求むる爲めに「婦人新聞」を讀んで居たのであるが卒然こして此んな疑問が起ッた」

「自分は何故此んなに品行方正のだろー？」。妙な疑問こ云ふ事勿れ妙なるまゝに事實なんだ。弱虫だからサ叶うもんかやッつけろ〳〵て樣な聲がドッカから聞へる。併し…………

「姉サン工女てのはドーだい」

「マァ貴君、あきれますネエー」

「何が？賣物こ買ひ物だ、當り前じあネエーか……ドーだい此所へは呼べないかナァー」

「其りや此所へは呼べませんワ 其所いらの料理店へ行らしッて、主婦に御しッやれば工場から引けてから來るソーですよ」

「何幾ら位るだろー」

「五十錢か位るでせう 善くは判りませんワ其んな事」

「高けエなア、女に其れ丈けやるのか」

「當り前でさァネ其の位る。」

いゝいゝいゝいゝいゝ
オヤッ！工女の淫賣だッて？？

僕は社會主義者である 現社會のあらゆる暗黑面に目を注ぎ耳を澄して此れを捕へ、總ての人々に向つて此れ見よコンなに間違ッて居るではないか、此れが改革せずに居られるのか、こ切込んで行くのが僕の仕事だ。

妙齢の婦女子をして、午前六時より午後八時半まで十四時間餘の長勞働を強ひ、倘は足らずして更に其の肉を賣らしむるさは、何たる亂暴なる社會ぞや、何たる無茶なる世の中ぞや、此の中に安然こして、工女ッてのはドーだいなぞこぬかしてけつかる、アノ野郎は誰だッ、畜生だッ、己が我儘を滿たさんが爲めに、可憐の婦女を犧牲に供する、アノ野郎はッ…………

が待てよ、賣淫の仕事こ糸操の仕事こ、工女は果してドッチがつらいのだらう？憤慨は憤慨である、迷……？は迷である。「婦人新聞」中にコー云ふ事が書いてアッた「其は悲慘な殺し爲せこ云ふのではない、只性慾の刺戟に到達せよこ云ふのである、對手の幸福の爲めに之を捧げよこ云ふのである」こ。彼等工女はその斎作の身を面白くもなき工場に閉ぢ込められて居る、多分性慾の渴に耐へずして居るのだらう、此れを癒す事はドーだらう？彼等の爲めには幸福かしら、然らば對手の幸福の爲めに 僕も又ウゝ、、馬鹿ッ。ア、矛盾は事實である。（未完）

日ポ協會こ本誌

本誌も讀者諸君の厚き御同情によつて、今日まで立つて參りました、別に此れこ申す程の榮もなく、常に自ら遺憾に存じて居りました、が、今度から本誌の一部を割いて重に文學的の方面に力を盡したいこ思つて居ります、こいふのは外でもありません、かの亡國ポーランドこ日本この間に或る交通が開かれたのです、それには先づ一番容易で、一番故障の少ない文學上からやつて行かうこいふわけなので、本誌は紙面の一部を割いてポーランド文學の紹介をなすこいふのです、重もだつてやつてくださるのは、あの「平凡」の著者長谷川二葉亭氏で、一つ骨を折つてやらうこいふお話しであつたのです、素より實業上政事上あらゆる方面に情交を通はせたいのは山々ですが、我等風情には思ひもつかぬとであります、行く〳〵は、必ず此れ等の方面にも發展するつもりでは居りますが只今はマア長谷川二葉亭氏の御助力のもこに文藝上の情交をなすに止つて居ります、故に本誌は一方に日ポ協會の機關の樣にもなつたのであります、日ポ協會こいふのは、長谷川二葉亭氏こ、ピルツスキー氏この間になつた會の名であります、日本こポーランドこの思想の交換、友誼の深厚を謀るものであります、

本號の小説「愛」こいふのは其計畫の第一歩であります、

お花

渡邊 淸・洋

利根の流れの
　眞帆片帆
亦も靜かに
　下り行く
儘になるなら
　あれあの船で
暮すその時や
　何時ぢややら。
夕淋しい
　お窓の下に
お花可愛いや
　何を泣く。
手織木綿の
　兩つの袖を
白いお顏に
　おし宛てゝ。
「女ながらも
　意氣地か御座る
富や位が
　そりや何んだ
嫁へお黄金を
　山程積むも
厭こ謂つたら
　金輪際よ
黄金で操は
　賣りはせぬ」。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

短篇「罪惡」

孤存生

「嬢様。あのお手紙が參りました」と女中は恭々しくいふ。

「そう。誰方から……」令嬢は鬢の解れ毛をかき上げつ、下女の方を顧る。

「ハイ。松木様からで……あの急用で御座いますの！」一封の桃色がゝつた封筒を下女は嬢の手に渡した。

「あの若し御用がありましたら……お呼び下さいましね。」

「えゝ。用があれば呼びますからね、何卒……。」

「それでは嬢様御免なさい！」

「何卒。」

親切で叮嚀な下女のお仙はそこ〳〵と彼方へと走つて往く。後見送つて令嬢何やら憂ひの顔色。

「松木さんから……何うかなさつたのでせうかしら……手紙計りは見ぬ中が花ね！」と獨語いたが更に又

「でもまあ好く遣つて下さつてね……私からは暑中見舞さへ出さないのに……ほんとに義雄さんの様な親切な方はないのね……」と頰笑み豊

北斗七星空に高く、鮮月斜に深く書窓の中に輝き、悄風颯と木末を拂つていと涼し。

「急用とは何んでせう？」

芙蓉も及ばざる美人、令嬢の粧ひいと艶に。

松本よりの書簡を薫濃き封筒の中より……否か内か讀むは依頼か……でも此清々しい水莖の跡は……私何うして……衫袖涙痕斑なり。

松本よりの書簡を見れば何時も心嬉しく思ふ程に常に松本の別名として游氏の君とぞ呼びにけり。……

されば今日の此お手紙讀んでも讀んでも到底も松本義雄さんの文章とは横にも斜にも見え様はずがない……あの柔しい御姿にも似合はざる御書き振り。……一度讀んで又讀んで胸の中で空讀する迄で繰返したが解らない……何うしたのであらう……そりや芳野の梅は篁園で野に咲く白百合は覊いであらふけれどあれ程迄で約束して……それは私だつて餘り愛想が無さ過ぎたでせうそれは私が謝りますわ……けれど過日の御言葉に今は學生の身の不自由がちだが來待つの葉の契細くとの一言を私決して忘れはしませんわ……私何うしたらいゝでせう……でもまあ怨めしいのは此御手紙……」と又も手紙を繰返し始めた

拜啓久しく御無音に打ち過ぎ何とも申わけ無之候へ共種々と都合有之候まゝつひ〳〵御無沙汰と相成申候

此頃の炎熱實に身を燒く計りに候へばさぞかし御前様にも御苦みの事と推察仕り候

偖て不肖頑健甚だしく、食量平生に倍徙するの兆あるは炎魔の力傳ふた恐ろしく感じ申候

就ては生近頃種々と多忙なる事務の依頼を受け心氣疲勞甚だしく爲めに誠に心元なくは候へ共暫くの間御無音仕るやも計られすさはれ之等は只々忙殺の爲に有之候へば惡からす御諒察下されたく願上候

それに附けても越し方にお互の胸裡に描きしくさ〴〵は凡て一夜の夢と御あきらめ下さる樣、げに轉變は世の常にて流るゝ水に浮ぶ泡現れては又消え絶えては又結ぶこそ今更物新らしく申上ぐる迄でもなけれども只々深く御記臆のほど願上申候　句に。

今晴れて又曇りけり秋の空

と云ふあり今は火大の候には候へ共人の心は秋の空に似て變り易きものにて候、生の如き白露の衣を身に纏へる悲れなる青年は朝日の光輝き初むる刻には葉末に消ゆるものなることゝ僕てより御承知の事と推察仕候貴女はさぞ生か突然若語を聞らせるに御喫驚被遊は御道理と察し候へ共之れとて想なき木の實には無之、一は生の主義の上より一は貴女を束縛するが如き事なき爲め赤心より誘出せし片言に候へば左様御承知被下度、生昨夜つれ〳〵のまゝ渓流の畔に涼を取らんものと散步仕り候處、不圖御前樣の御姿を御見受け申候故遙かに呼び掛け〳〵追ひ求め候へ御前樣は御承知にてか否かは存じ申さず候へ共暗に紛れて御逃げ被遊しは如何なる故にて候か其折錯綜の單衣に黒縮緬と思しき黒の内古帶をいと豐かに腰に巻きつけし青年が御前樣の跡を追ひゆく姿仄かに拜見仕り候、何が何やら生き如き頭腦の者ならぬ者には解り申さねど御前様も御勉强の身少しく御自重肝要かと存じ候、倫斯如事は鬼角口賤しき人の耳に響く時は事後勢と相成り到底も大學の大先生にても解釋の出來ぬ程「高等」と相成るは草々として聞かなれば人の口に戸を立られぬ前に御慎みある様願上げ候、貴女は生が不生戀愛の自由も口にする松本が如何にして如斯事を申すかと御怪しみ被遊事は察せされ候へど、之は大なる誤解にして自由戀愛なるものは昨夜に男女が不義の密會を意味するものには無之只に清淨なる、情緒と一致協合せる炎の如き精神とが聯結し更に相互永久に扶助は更なり獻身的愛情の交換を勸めんとするもの之れ生の平生主唱する處の自由なる戀愛にして只々生殖器に關する思想にては毫無之、無論生殖器は戀愛の中樞とも申すべく之れに對する慾望又少しとせすさはれ之は神聖と名づくべき力無之相互の精神融合する處即ち前述の事實の方興つて大なる事御承知有るべく候但し野了の奴隷、御情婦伺ひ的は野望で貪るが如き凡て非にて候無論生は彼の青年と貴女とが此公明なる方法を取られん事を希望するものにして他に私情なき事明かにて候生も社會主義者の片端自己の利益ある範圍にて自由を主唱するものには之れ無ければ貴様御承知下されたく松本義雄は一ケの婦人の自由を縛ぐる程の無骨漢には無之候へば近からぬ日に公然御會合希望仕り候、尚生の主義上、貴女の自由の爲め、生は一度露と身を消し、暫時の間御交際を斷つべく候に付御諒承被下度願上申候、亂筆匆々

八月十五日　松本義雄より

櫻井梅子様御許へ

嬢ははら〳〵と涙を零して、双手を胸に押當てつ只默念。嵐よりも閑し、皎月冴えて高樹の上に輝き、内闇去つて悠々！。

第二

生ひ茂れる枝は影を交へて高門を鎖し、……て雨露の恩に沾ひしかやう、庭内には……柳解れ、小鳥鳴き、折々中庭の邊から風のまにまに、響く琴の音いと妙へに……玉波銀光を交へて流ける池畔の、草葉の間に秋の夜こと繁く啾く虫の音にもまして清涼の思ひに充つるは……此家の主人が世の常ならぬ物もちにてやあらんなどゝ。客待つ車夫と小間物屋の女將との物語時は葉月の十旬、夕陽山の端に折れて、詩璧星明く天空に現れ、皎月清く物象を照して、恰も宙を飛ぶかのやう。

今しも鬱蒼と繁れる木の間を、縫ふが如く彼方此方と徘徊ふ青年あり、色白く、眉濃く、頰少しく瘦、清しけなる瞳子は星を宿して爛たり、セル地の黑羅紗の襟々したる身に纏ひ、流行の高襟夏帽に、深く面を隱し、桃丼靜かに中丈の瘦姿いと美し、青年は、泉璧危石に倚んで烟なすはこりを浴ふて、中庭へと通へる小徑を求めて、傍の草花一つ摘んで、香に醉へるが如し青年は、白き額に青筋寄せて、何やら焦立つかのやうに、歩散いて忙し氣に散しつ。

折しも彼方の樹陰に黑き人影見えければ、青年ハツと打驚き、傍への叢中へと身を隱し、心密かに來る人誰れにやと窺へるが如し。

彼方の人影、縮かと計りに輕々と、此方へ歩み寄つて來る、其影は確かに婦人！、彼方此方と眼を配りつ、今しも叢の前へと差掛りし様ふ迄でもなく櫻井梅子なり……。

「今のは確かに村山さんに違ひないは／＼！何うしたのでせう？」と左見右見。

さきの青年は叢の中より……春色調……靜々と現れ出でつ、早くも梅子の纖き腕を輕く握りて……最前から道を迷ひし事、中庭が解らぬ事、人影に驚いて叢中に隱れし事、それが梅子であつて嬉しかつた事……等を續々として糸を引く様に語りつ、更に新らしき握手を交へた、梅子は獨手を離す事がなく

「何うも濟みませんのね、私も必然左樣だらふと思つてね、お迎へに來たのよ」

「そうですか、そりや濟まん、だが突然の御招ぢじや來賓もちつと苦しむ」と笑ふ。

「一たつて不意に家内が空虛になつたのですもの詰め込む物だつて急に入用のは無理はないわ」と共に頰笑む。

「然し梅子さん全體中庭は何處だね」

「直きよ、向ふの燈火の見える處よ、今は木で見えないけれど、段々に見えてよ」

「ハヽア左樣！、で紅亭と云ふのは？」

「紅亭は即ち中庭の別名なのよ」

「なる程、紅亭！好い名だね」

「けれど村山さん、貴君はほんとにハイカラね私の兄のお朋友で湯淺さんと云ふ方と義雄さんと云ふ方を知つてるけれど、湯淺さんは高襟は高襟だけれど拙いのよ、それに義雄さんて方は大學生ですがね短い袴で、鐵緣の眼鏡をかけてね、僕は貧しき男女の友だなんて云つて少しも恥しがらないのよ、私が折々お茶を持つて行くと勉强なさい、そして貧乏人を助けておやんなさいなんて云ふのよ、私嫌で〳〵堪らないけれど、兄さんが怒るからお茶を持つて行くの、貴君ほんとに立派ね！」

「梅子さん、戲談はよしだ！さあ行かふじやないか？！」と走り出す

「あら變な人だわね、誰れが戲談云ふもんですかね、貴君こそ戲談じみた……」と面を紅める

「ヤアお怒りか濟まぬ〳〵僕の方が戲談だつた向後大に謹しまふ、女王の逆鱗恐ろしいかな」

「おほゝゝほゝ」

「はゝはゝゝ」二人共に打笑ふ。

蛾々たる玉顏に紅粉を粧ひし梅子、高襟で品のいゝ村山光造、宛ら花際をさまよふ雙蛺蝶池邊を闊歩する鴛鴦を欺く計り……梅子は村山の村山は梅子の……互に手に手を携へて、紅亭へと道を急げり

紅亭の前面には清江涙々として、流れの響きは自然の樂を奏づるかの樣、梅子の胸にはそれが相思の曲を彈づるかの樣に響く、裏窓から颯と吹き入る綠樹の涼風は、我戀人の訪ふにやさ、思ふ心ぞ哀れなれ。

(此項未完)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

放浪

ゴーリキイ 著
某生 譯

（一）

初めて彼に會つたのはオデッサの港である、彼の頑固な肩の廣い姿、美しい小な鬚に縁付けられてゐる顔、紛れもない高加索人の表情は、既に三日間特に私の注意を惹き、而して絶えず彼の姿が眼の前に隱現くのであつた。

彼が杖を噛みながら港の水に悲しい鋭つた視線を落す時、私は塔の花崗石の上に佇立て凝と看てゐたが、凡そ日に十回位は、徘徊戀悄者の散歩するやうな歩調で私の前を往來るので、「彼は誰だらう」と想う疑念が生じた、而して何時も嘲弄やうに私の鼻の端に來たが爲め、到頭顔馴みになつて了つた。

彼の生たやうな蒼白い顔、黒く汚れた帽子、懶惰者のやうな歩調や鈍い退屈したやうな表情は、遠處にゐても直ぐ眼に觸つた。

汽船や工場の轟々鳴り響く汽笛、鐵鎖の鏗々く唸る聲、勞働者の擾動、狂亂怒濤のやうな港の生活が、各國から集まつて來る人類を圍んで、胸や神經を鈍らし、瘋狂白痴に運んとする此の港で、彼の姿は全く不可思議であつた。

此港に生活してゐる幾多の人類は、巨人の如き工場、晝夜間斷なき混雜と絶えざる勞働の奴隷であつた。汽船と汽車との間に交換される荷物の運搬は、熱病のやうに昂投を極めて、勞働者は激働に疲らされ、彼方此方に疾驅せられ、呼ぶ、逃亡する——塵芥と汗は彼等を蔽ひ隱してゐた——此喧鬧の中を、彼は遅鈍な顔色をして悠々と總てに對して無頓着に散歩してゐた。

四日目の正午頃再び彼に出會つた「實際誰だらう、彼と知己になつてやらうか」と考へて彼から遠からぬ所に、甜瓜とパンで中飯を食ふと思ふて腰を据え、視線を彼の上に結付けて向を轉えた、如斯な率直な風で言葉を交換することが出來るか知ら、彼は茶箱の累積に凭れて、閑に遠方を眺めながら、笛でも吹くかのやうに杖を指で彼方此方に廻してゐた。

運送屋の印絆纏を着て、石炭の塵埃で眞黑になつてゐる私には、彼の大人と談することは六ヶ敷さうに思はれたが、併し又驚ろいたのは彼が一心不亂に私から目を放さずに凝視てゐた、而して其の兩眼からは一種の不愉快な貪婪な少なくとも動物的の焔が輝いてゐる、私には其の意味が直ぐ理解つた——彼の胃袋は空になつてゐるのだ——四方を見廻して底聲で問ふた。

「食ひたいですか」

彼は戰慄した、飢で餓た動物のやうに、力強い逞者な齒で其の意味を洩し、羨望むで四方を警戒したが、誰も吾等に注意してゐないので、私は半分の甜瓜と一片の麪パンを與つた、すると彼は頗る迅速に、此の二個の物を取つて元の場所の背に消えた、時々顔に滑つてゐる帽子、疲れた顔や額を流れる汗の露が顯えた。

彼は滿面に微笑を湛へて、呼吸をするのも五月蠅しと貪慾て食ひながら絶えず低頭した、私は暇潰で彼を待して置て肉買ひに走り、一片買つて來てそれを與へ、而して何も知らない他國人を保護したので好奇心に驅られて箱の傍に蹲むだ。

今まで盛に食つてゐた彼は驚いて、猛獸のやうな眼色で四方を見廻した、誰が他人の食物を奪ものか、再び沈着いて食ひ始めた、私は此の餓た同朋を見て悲哀に堪へず背後を向いた。

「難有う、どうも難有う」と私の肩を掴むで露西亞語で言ひ、亦手を握り力を籠めて振つた。

五分間經て彼は自分の物語を始めた、彼は露西亞のグルジーの人で、非常に富た侯爵の一人子息のシャクロー、プタッゼと云ふ者で高加索道の停車場の一室に知人と共に生活してゐたが或日此の友が侯爵の金と高價な物品を拐つて逃走し、バツームへの切符を買つたと聽いて早速追跡したが、バツームに來て聽くとオデッサーに行たと云ふ、再び切符を買ひ換えて出發した、オデッサーの警察に手續をして二週間待つてゐる中に旅費は全く費なつて仕舞ひ、丁度今日で四日一片のパン精も食なかつたさうである、彼の眞面目な哀訴と呪咀を混じた物語を聽いて、酷く動かされ、切に顔を覗くと、まだ未丁年の質朴、無邪氣な愛すべき少年であつた。

友情を以て交際したにも拘らず、不義をなして逃走した詐欺者に對して沈んだ憤激の焔を燃した、若し彼が盜賊を捕へなかつたら、彼の嚴父、老侯爵は劍で彼を刺殺すかも解らない。

私は密に心配した、此の少年を守護してやらなければ、貪婪な都會に鵜呑にされて仕舞ふ、下等勞働階級は著しき不慮の災難の爲めに殉されたのだ、シャクロー侯爵も其の運命が眼前に迫つてゐる、一歩誤れば此の社會の手足になる、私は恁う思ふた故進んで彼を保護したかつた。

私の一片の好意はバツームまでの切符を與へることが出來なかつた、それで停車場の會計課に行つて一大事件が出來て、是非彼を扶なければならぬから、私の自由乘車券を彼に與つて呉れと頼むだが、會計課長も乘車券を猥に他人に與ることは重大事だと云ふて拒絶された、不已得シャクロー侯爵に此旨を述べ、警視總監に會つて事情を話して、切符を貰つたら宜からう必定呉れる、汽車賃を延期して呉れる、證明書を呉れるに相違ない、と勸めたが彼は行かない。

「何故行かない？」

彼は料理屋に未だ拂が濟でゐないので誰か料理屋を殺さない内は行ぬと催促される意味を洩し塵芥の中から起直つて警視總監が困難に同情して多少の保護を與へて呉れるだらうと云ふことを今切に考へるやうであつたが、其他、此れに關聯して生ずる幾多の困難は、更に熟考する模樣もなかつた。

境遇は紛亂錯雜の淵に沈んだ、

愈々私は決心の臍を堅め、可成く長時間の勞働をやつてバツームまでの汽車賃を儲けやうと思ふたが、悲しい事には餓てゐるシャクローが三人分或はそれ以上食ふので、容易に其の希望を充すことが出來なかつた。

丁度其の時に當つて各地方から、勞働者が大洪水のやうに此港に流れ込んで來たので、今まで毎日八十カペーチの收入が、兩人で六十カペーチしか儲からない、到底も食へないから侯爵を連れてクリムの方へ行くことに決めた、如斯な都合であつたからオデッサーでは一日も愉快な日はなかつた、而して私は徒歩で行くことを侯爵に相談して、恁んな約束をした、若しチイフリスに行く同伴者がなかつたら私が彼處まで送る、若し良い同伴者があつたら兩人は離れやう、侯爵は長靴や帽子を見、紙幅を手繰つて何か考へながら嘆息して同意した、兩人は徒歩でチイフリスへ向つて出發した。

（二）

吾等がチエルソンまで來た時、私は此の侯爵を質朴野蠻な少年として、亦素朴善良の者としての外に、猛烈な動物的の野蠻性を帶びた人物であることを認めた、それは實に同情に堪へない、彼が滿足してゐる時は頗る喜しげな顔色をしてゐるが、空腹になると亦非常に悲しむのである、途中ら彼は高加索の話、彼等の饗宴や農夫の境遇に就て雜多な話を聽かした、特別に美しく感じた、其の物語は眞に興味を以て謹聽した、が併し此の紳士は一人の同伴者に尠からぬ不興の光を示した、その話は恁うだ。

或る侯爵家に近隣の者が、饗應に招待されて酒を飲み、チュレク、シャシュリクを喰ひ、亦ラファシュヤピラフを喰ふた（是は露西亞の食物なるが故に飜譯し難し）然る後に侯爵は客を厩舍に案内した。

馬は鞍を付られてゐる、侯爵は其内の最も駿れた奴を撰んで野の上に乘出した、馬の體格と云ひ飛ことの速さと云ひ、其處に集まつてゐる客の非常な賞讃を得た、侯爵が第二回目を驅出さうとした時、突然一人の農夫が飛出して野の上の白馬を見て……高慢な顔をして嘲笑つた、侯爵は多くの客の前で赤面したよ……彼は甚く憤激し、額に皺を寄せ手招きで農夫を自分の傍に喚び寄せ、長劍で頭を打擲り、而して白馬の耳の中に拳銃を打込むで殺した、此の椿事に警官が出張して侯爵を拘引し、加害者として有罪を宣告された……とシャクローは侯爵に同情を以て語つた。

夫れは何も同情すべきものでないと説明しやうとしたが、彼は私に敎へるやうに應へた。

「侯爵は少數であるが、百姓は多數だ、唯だ一疋の百姓の爲めに侯爵を有罪にしたのは怪しからん、百姓は何だ、「此れちやないか」と地上の土塊を指示して。

「ア、侯爵……彼は天上の一ツ星のやうなものだ」

兩人は互に爭ふた、彼は狼のやうな齒を露出し狂暴な顔色で勃然と怒つた。

「マキシム君、默り給へ、君は高加索の風俗を知らない」と彼は私を怒鳴つけた。

私の説明は頑固な彼に對しては全く權威がなかつた、然し私には日月星辰の如く明らかであつた、彼にはそれが可笑く見えたかも知れん、腦髓には何等の刺戟も與へなかつたらう、孰れにせよ、私は私の意見の眞理を説破し、彼を屈服せしむるが爲めに酷く疲勞したのである、彼は漸く無言で何か考へて簡單に口を開いた。

「兎に角高加索に行つて見給へ、僕の言が眞理であるか何うかは解る、實際それが事實なんだから、君の言ふことは皆間違つてゐるよ、マア聞いて見給へ、萬人が萬人僕と同事を言ふから」

私は沈默つて考へた、彼の言ふことは事實ではあるまい、寧ろ反對かも知れん、然し彼とても全然つきり無敎育の人間ではなし、亦自分等と同じやうに是非曲直の解らない者でもなし、と沈思えこんだ、彼は凱歌を擧るやうに社會の明かなる事實を示し、種々な出來事の眞相、權利や法律に就いて堅く主張し、私の沈默が彼に談話の鋒を緊張ける機會を與へ、益々盛んに高加索の風俗、習慣、奢侈、貪婪、我利、我慾を素抜いた、彼の談話は私の心を凹え、驅逐して、最高度まで憤激せしめ、富と權力の前に於ける深き尊敬は、太古の野蠻時代に驅逐し、紳士の誦つた人類の生活に緊要缺くことの出來ない倫理的觀念の敗頽を歎き、而して私は或日突然恁んなことを質ふた。

「君は基督教を奉つてゐるか？」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

『無論、君に賀られるまでもない』と肩を聳て首を縮めて應へた、私が同意を表しながら質ると、彼は能く知つてゐると云ふて說明した、

『それは曾て猶太教に反對した基督教だ、猶太人が彼を十字架に繫けたが、然し彼は神であるから死ない、蘇つて天國に導かれて、吾等人間に新しい靈光を與へた』

『それは間違つてはゐないか……』

私が質ると彼は嘲弄するやうな、不思議な顏色をして私を睨み、而して反問した。

『君は基督信者ではないか、何うだい、僕は同じく基督信者だ、殆ど世界の人間は總て基督信者だ、左樣ぢやないか、何で君は其樣ことを質くのか、見給へ人間の生活を……生活そのものが基督教の法律だよ』

此の言葉に煽り起られて、クリストの生涯に就いて語り始めると、彼も最初は非常に注意して聽いてゐたが、漸時に興味が減なつて終に欠伸をするやうになり、私の話に意のない樣子を觀破ると直ぐ話の調子を變て、彼に理解るやうに、相互扶助の利益、學問、知識の利益、合理の利益、利益、利益……總て利益になることのみ語つた。

『自分が法律である者が、一番強い者だ、他人に聞く必要はない、盲人は獨で往還を往來いてゐるよ……』と粘液質のシャークロー侯爵が應へた。

彼は自己に忠實だ、恁う考へて直ぐ彼は野蠻で猛惡だ、怨恨の焔を反對者に燒付やうとしてゐることに感付いた。

土地と吾々との間に接觸點を見出し、此の土地の上に兩人は接近して、互に胸襟を開くことが可能るといふ一ツの希望を有つてゐた。

私は簡單に話掛けて、和解を促がした、すると彼も非常に喜んで「卓越したる認識」といふやうな風で私の勸誘を判斷し、仁者の聲色で對話を始め、終に和解に同意を表した、然し私の立證が彼の宇宙觀及び人生觀の石の如き絕壁に觸れて跳飛ばされ、而して塵中に葬むられて了つたかと思ふと實に口惜しくて、悲しまざるを得なかつた……。

ペレコツプを通過し、既に二日間地平線に浮出てゐたクリムの山に近いた、蒼青く、霞の鎖に繫がれてゐる彼を遠く望んで內臟を洗滌ひ、クリムの北岸に佇立て夢の世界を徘徊ふた、侯爵は自國の歌を不興らしく喃々唸つてゐた、旅費はスツかり消なつたが調達の方法もない、其時丁度築港工事が始まつてゐたフエオドジアへ兩人は、一生懸命で驅着けた。

侯爵は惡なことを言ふた、兩人が一所に働いて、金が儲きたら汽船でバツームに行うぢやないか、——彼はバツームに多くの知人を有つてゐる、彼處に行けば、庭掃きか門番位には周旋して吳れるだらう、其時私の肩を突いて樂しさうに舌鼓ちしながら——君の生活に就ては僕が工夫する！チエ、チエ！、君が酒を飲みたけりや——それは幾何でも飲める！、羔羊肉が食ひたけりや——幾何でも食へる！、グルジー人と結婚が仕たけりや——金滿家の娘が幾何でもある！チエ、チエ！……其女が火山石を燒く、赤兒が產れる、それは〱澤山產れるチエチエ！。

此のチエ、チエが最初から不思議で仕方がなかつた、酷く私の心を惱ました、終に嘲弄されるやうに感じて癪に障つた、母國の露西亞では家を驅る時に此樣な聲を發すが、高加索では、活氣、愛慾、滿足、悲哀を表はす間投詞に使ふのである。

彼此する中にシヤクローの黴の生へたやうな服は破れ、靴は裂けて所々に風通しが開き杖と帽子はチエルケンで賣つて了つたので、彼は帽子の代用に停車場の小使の冠る古い頭巾を被つてゐる、初め頭巾を頭の上に載る時——殊更歪めて横側に引懸けて——私に問ふた。

『何うだ、能く似合だらう、見て吳れ……』

旅行の色々

（二）　ひ　で

大阪より岡山へは約六時間を要するゆへ午前十時頃に梅田停車場を發せし山陽線は岡山驛に着せしは、誰そや彼れの時なりし、十五年も相見ざりし鄉地の風土何か知らん懷かしく、腕車の上にて左顧右眄しつゝ此處は何町なりけり、此橋は西川に架せし何橋とか云ひしと、種々の感想に鎖されて、水の手なる姉上の邸宅に車は引きつけられぬ、と見れば御影石もて高く築き上げられたる土塀の幾百間たる奧に最ともいかめしき門構へは、顯はれぬ、車夫君の、かざりしたる提燈の光りに澤田正泰といふ表札を認め此處に相違なきを、確かめしも、悲しいかな、貧苦に慣れたる吾はなんだか、王侯貴紳の門に出入する樣覺へて、全身慄戰くではありませんか兼て此大建築は數々の來書にて聞知しては居りしも亦今更の樣に覺えて、心中先づ無限の感に打たれたり、車夫君の忍び窓に口を當てゝ訪問へば少女はド駄の音高く來りて戶を開きぬ、因りて、吾は東京より來りし旨を陳べ取次ぎを賴めば、すぐが玄關脇なる臺所に居られたる姉上は珍らしやと笑傾けて拶らひ玉ふ、姉上と共に在りし末娘の敬子さんは、まあ、おばさん、ようおいでなさいましたと、直ちに應接間に案內を點じて絕へて久しき親昧挨拶は取り換はされぬ、それより湯よ晩餐よと親切に世話せられ、兄上も兒島に在る別莊に早朝魚釣りに行かれしも、九時頃歸宅せられて、親しく久濶を叙し疲勞したればとて寢室に入られければ四女靜子さん及び五女敬子さんと姉上とは午前一時頃まで種々の談話に耽り、疲れつらんに、心なの事してけりと姉上は吾が室を子供さん等の勉強室なる隣りに設けられ、其處にて獨り夢路をたどらしめぬ、翌朝夢覺めて、ふと思ひつきしは、此家の構造もさる事ながら、第一は兼て兄上が吾れ若し富を得ば山紫水明の絕景ある好處をトして其處に住居を構へん是れ吾が畢生の願ひなりとの志望を遂げて此の大建築を起されしと聞く、早く起き出でゝ、其絕景を眺めばやと沐浴の後幾百間に涉る土塀につきて後庭に出づれば老木新樹取りまぜての松林あり、仰いで前方を望めば、鬱蒼たる綠樹につゝまれたる操山の連山あり俯して下方を眺むれば朝日川の淸流は白帆を乘せて波靜かなり、其景色得もいはれず、無風流の吾も暫し天の人か地の人かを別たざりし、須臾にして、吾は何に感じけん、彈かれた如くに此處をば飛び退き——そは吾が胸の囁きが成功者を羨む卑劣女よと嘲けるにて候らひし、愛讀者諸氏よ貧苦の吾にも斯かる姉上御夫婦の血に連續がることは奇しき因緣に候すや併し姉上の嫁ぎましませし時は貧といふ程に非るも、斯かる一代の豪富を顧はるゝ人とは思はざりしが、勤勉力行の兄上は品行亦方正にして寡默溫良の淑女たりし姉上と琴瑟相和し所謂共憂共樂の下に斯かる豪富を得られしなれ此姉にして此妹あり其間の物質的距離は雲泥も啻ならざるも姉妹は依然として姉妹なり、吾今乞兒して憫を門前に乞ふも依然として姉妹たるなり、斯かる狂激の妹を持ち玉へる姉上こそ眞にお氣の毒の至り也數日前より吾が來岡の事紙上に發表されしとて土地の有志は訪問せられ亦出獄當時相見しのみにて二十年程疎遠せし津下粂子女史は、今や其良人を失ひて淋しくも舊來の商業を營み不自由なく消光さるゝと聞き二十年前民權自由の聲に狂せしめし無名の女傑が老後の感想を叩かんものと訪なへば面影の左程に昔しに變りし樣なきも最早や七十一歲なりとはいはれぬ、されど鏗鏘たる動作にて吾が來訪を喜び種々と饗應され尙日をトして其當時の友人を集へ大いに舊時を談ぜんものと堅く約し其日は二三の親戚を訪問し黃昏澤田家に歸りぬ

（未完）

私儀足尾兇徒嘯聚被告事件に關し入牢中は厚き御慰問を辱ふし多謝々々第二審も又無罪の宣告を受け去る二月八日無事出獄仕候得共又檢事の上告と相成申候間此段同志及同情者諸君へ謹告仕候也

當時府下淀橋町柏木三百二十六番地

鑛水事　南助松

腦病、脊髓病
神經病、精神病　專門治療
土地高燥　電氣治療
閑靜　マッサージ治療
東京田端　田端停車場西二丁
東京腦病院
電話下谷二三〇一
院長　後藤省吾

○ジヨウ　コールの話
丹野房子譯　定價金二十錢　郵稅四錢
本書は甚だ忠實にして機敏なる少年が富家の給仕に住み込む面白き手續き及び彼が首尾よく給仕となりて後思ひ掛けなき奇禍に罹りしも運よく危機一髮の間に其の生命を恢復せし極めて興味深き讀物なり。今日の如く雇人の風儀甚だ惡しく所謂奉公人根性に充ち滿ちたる者の多き時に當りて此の如き書を讀むは其愉快なること實に謂ふ可からざるものあり。

○ベテレヘムの厩
リウイス、ワレー著　宮田了山君譯　定價二十五錢　郵稅四錢
泰西にて有名なるベン、ハーと題する書中に基督降誕の時に際し三人の博士等が如何にして東方より來りしか其顚末を詳記せり。本書は平易なる美文的言文一致體にて之を記述せしものなり。之を讀むに興味津々として盡きず何人も之を讀み終るまでは卷を掩ふこと能はざる可し乞ふ愛讀を賜へ。

○曉天
定價二十錢　郵稅四錢
此書は小兒の爲に世界萬物の創造及基督の傳を解り易く書きたる者にして日曜學校生徒等の參考に資すべき稀有の珍書也

○童蒙基督傳
定價五錢　郵稅二錢
此は表題の示すが如く小兒の爲に極めて簡短平易に書き綴りたる基督の傳にして日曜學校生徒の教科書若くは參考書として甚だ有益なるものなり。此の如き書は世に其類稀なり是弊舘が之を江湖に推薦せんと欲する所以なり。

○十字架の道
バチエラー、オブ、デヴィニチー　マスター、オブ、アーツ　小畑久五郎先生說教
定價二十錢　郵稅四錢
小畑先生は拾餘年間米國に留學して神學文學を研鑽し歸朝後青山學院神學校に教鞭を執り且學院教會を牧し純正福音の傳播に熱衷し居らるるが近年我邦基督教の漸く非福音的となれるを慨し茲に昨年一月より前後八回に亙りて十字架に關する諸要點を說教し基督教の根本的眞理を闡明せられたり弊舘先生に乞ひ右說教原稿を修補して一冊となし出版する事となれり願くば教界の諸彥速に一本を購求ありて贖罪、救拯、慰安幸福の道を深く味ひ玉はんことを

東京市京橋區銀座四丁目壹番地
內外書肆　教文舘
電話新橋二一五二・二六番振替貯金一一三五七

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

消息

石川三四郎兄より

一陽來復の春と共に出獄中も多少の活氣を添へ來り候、但し小生の霜やけ皆ぎれは未だ癒えず△先日は田中翁はじめ諸兄ドシ〳〵と御入來、御元氣の樣を拜して安心致候△安部氏巣鴨町に御轉居、御宅より獄門が見えるとの御來書、心強うなりし心地致候△堺兄等も一同にて愈々入巣せられし樣子に候、漸く暖くなりし所にて仕合に候△先日、下谷なる吉田氏の御名を以てシヤツ、足袋、手拭など御惠送下されし方あり御厚情深く謝上候、但し獄中にては如何に酷寒にても獄衣の外は着用を許されず、儘ならぬ事に候△久しく小生の音信が紙上に現はれぬこて諸方より御問ひに接し申譯無之候△殊に故郷の老母が痛く心配せられ候趣、來書に接し、悲しく相成候、姉に申す乍御手數此書着次第小生頗る元氣なる旨母の許へ御通知被下度、呉れ〴〵も願上候△社會新聞社の諸兄は昨年來寒中をも厭はず諸方へ遊說なされ候由、其れに小生の如き獄中に安閑致候事、誠に本意ならず候舊き事なれど西川兄北海道よりの年賀狀に曰く『君は獄中に新年を迎へ、僕は雪中に舊年を送る』と改革者は何時も苦勞が絕えぬものに候△兄よりの來書に、僕出獄の上は『新紀元』再興の浮說ありと全くの浮說に候、併し新紀元の主張をドコまでも貫徹すると、我が任なりと覺悟だけは致居候、機の熟するあれば復た旗揚げ致すべきは勿論に候、是れは御內兄〳〵△木下兄の『新生活』は景氣如何、一部御惠送願はれまじくや、聞く所によれば大部地味なる裝を以て現はれし由、うれしく存候、地味にては一寸賣行き惡かるべきも一時の難を忍んで其態度を永續せられんことを希望仕候△戶垣君は僕の出獄祝に手づから下駄を調製し賜はる由、資本家が千百の寄送にも增して難有候△諸方より書籍などの寄送を受け候も一々御禮申されず、唯だ心に銘するのみに候△逸見兄に申す、先日御來訪の節謝らざる御多務にて、少々面をくらい、用事一言も話さず、遺憾に候出獄まで待つべく候△僕在獄一年、學び得たる者三つあり、親の慈悲、天道樣の有り難き事、人悉く清きに世の甚だ汚穢なる事、此の三つ、說明を要す、出獄の後に讓る△丸善へ誂し書物未だ來らず候や、但し催促する譯には非ず△姉の許へホフマン氏より基督敎攻擊の書册を送り來りし由、思ふに現今西洋の耶蘇敎が無價値なるだけ、之に對する攻擊も無價値なるべく候、神ありの無しのと言ふが、宗敎、非宗敎の區別には候はず、唯だ至誠を以て己に對し、人に對し、天地に參するや否やにあるべく候、我れは常に自ら省みて至誠の足らざるを憂ひ申し候、然るにホフマン氏の如き遙々書を送りて御身を啓發せんと努め給ふ誠の親切、深く感謝すべきに候はずや、吾等は世の攻擊、嘲弄に遇ふ毎に、貴き敎の鞭を受くるの心地にてありたきものに候、姉、此頃は炊事までを一手に御引受被遊候由、總ての事物は皆敎訓に候願はくは『吾れ神の爲に生く』の自覺を以て萬事に當り給はんことを、又た常に此心を涵養せんことに自ら努め給はんことを

梅が香匂ふ春の御空に幸なる讚美の歌唱へ給ふ

赤衣の寒生 旭山

逸見兄
福田姉

大石碌亭氏より

世界婦人は活字が變つたので大さう體裁がよくなりましたあれ位材料が澤山あれば雜誌にしても立派なものになるのをワザと新聞型にして置くのもチョッと面白いと思ひます

新紀元の殘部まだ之あるよしどうか一組だけ御讓りを願ひたい、序に製本してこちらへとりよせたいと思ひますから、京橋區因幡町八番地椎橋まで御送り下さいませんか

尙ほ見本として、やりたい處がありますから、本月分の世界婦人を六七部殘本がありましたら私方へ送つて下さるやう願ひます

右等の代として貳圓の小爲換券一枚封入して置きます

二月十一日
紀伊新宮 大石誠之助

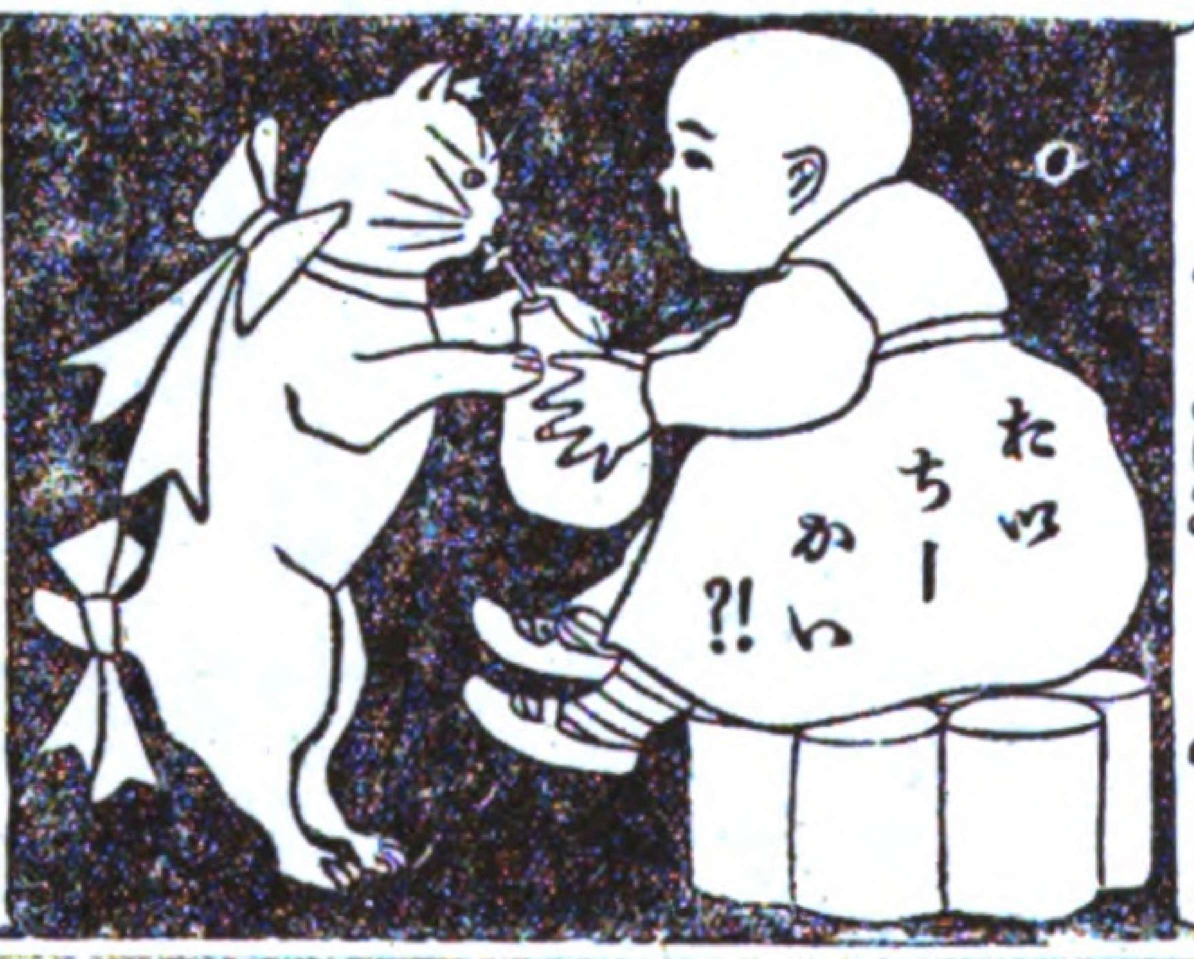
福田英子樣

書畫骨董雜誌

一部金五錢十二部前金五十四錢廿四部前金一圓
（毎月一回發行）第十六號二月一日發行
東京駒込東片町七十 書畫骨董雜誌社
（振替貯金番號第六八八九番（振替貯金にて申込みは一口金一錢增）

齒科治療 自午前八時 至午後十時
吉瀨齒科醫院
院主 吉瀨才市郎
東京神田須田町三十六番地（萬世橋內右横町）
●藥價手術料共半額
●貧困者施療

伊豆三島 花島煉乳場製
名譽ある 金鶏ミルク



發賣元 逸見山陽堂
東京市日本橋區大傳馬町
（電話浪花二一五番 振替貯金口座三九一六番）

ユニヴァサリスト
三月三日 第三卷第三號
一年分四十錢
△科學宗敎調和の福音を唱道してより玆に三年
△本號にはユニヴァサリスト講壇の說敎（赤司繁太郞氏）論說、雜錄等材料豐富なり△一ヶ年分前金に四十錢を添ゆる人には『萬民救濟の福音』（定價一圓五十錢）の大冊殘本あるだけ進呈すべし至急申込なくんば殘本なきに至るべし
東京市小石川區小日向臺町二丁目二十七番地 世光社

●實用看護法 成瀨四喬譯 定價四十錢 郵稅六錢
●人の母 中村春雨著 同五十錢 同六錢
●婦人の鏡 松村介石著 同三十錢 同四錢
●新美人法 松浦政泰著 同廿五錢 同四錢
●伏屋の曙 座古愛子著 同四十錢 同四錢
●家庭閑話 高橋卯三郞著 同五十五錢 同六錢
●少女 綠岡隱士著 ○當分の內一冊三十錢 同廿五錢 同四錢
●歐米家庭德育佳話 松浦政泰著 同五十錢 同八錢
發兌 東京市京橋區尾張町二丁目十五 警醒社書店（振替貯金五五三番）

應用市政論
安部磯雄著
四百八十頁
定價 金壹圓貳拾錢
郵稅 金拾貳錢

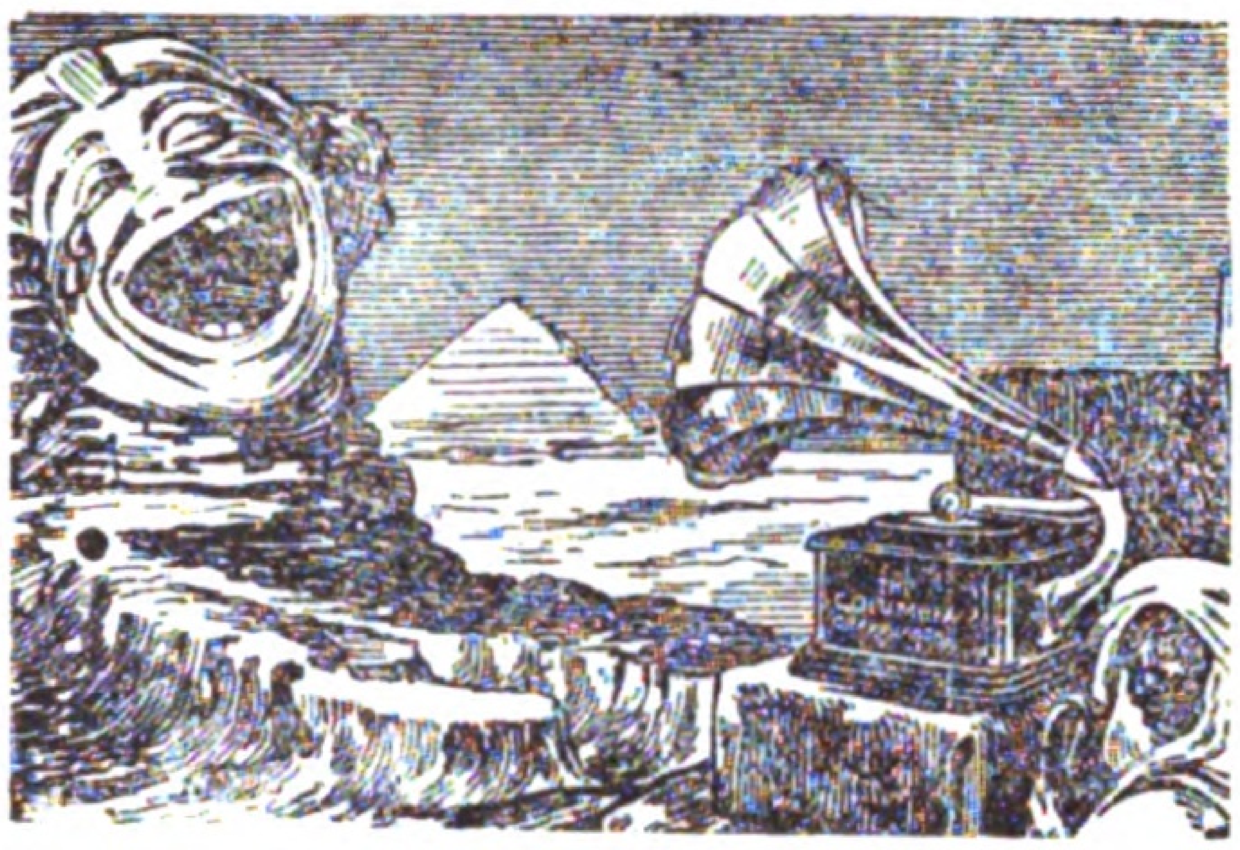
本書の論ずる所は都市の發達市の立法及び行政、市區改正、交通機關、道路掃除、水道、瓦斯、電氣、公園、市場、家屋、衞生、敎育、娯樂、財政等の諸問題にして啻に歐米諸都市の現狀を詳說せるのみならず著者特有の識見を以てこれを我國の都市に應用せんことを企圖せり、一面より見れば經世家の爲に社會問題、經濟問題、政治問題の解決を試みたる特種の參考書にして、他面より見れば國民の爲に新奇なる都市問題を紹介したる市民讀本なり

發行所 東京市本鄉區天神町二丁目廿五番地 日高有倫堂
大賣捌 東京堂、至誠堂、前川、上田屋、大阪福音社、寶文館、筑後菊竹

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●天賞堂特製　大聲寫聲機平圓盤レコード新着

本堂特製東洋一手販賣に係る大聲寫聲機日本譜平圓盤は其成績頗る佳にして洽く世上の好評を博し曲種の多き既に數千に上り需用倍々增加して着荷の譜盤毎に數日を支へざるの盛況を呈せるもの是れ偏に愛顧諸君の賜にして深く感謝に堪へざるなり今回又左掲の如く大方各位の期待せらるゝ最新特製の日本譜及び再製譜共更に數百種着荷せり本堂は此際江湖に對て特に低價を以て之を頒賓し以て平素の眷顧に酬いんと欲す冀くは多少を問はず速に御需用の榮を給らんことを



●長唄之部
三　絃　杵屋六左衛門
唄　芳村伊十郎
秋の色種●勧進帳●吾妻八景●執着獅子●元綠師●鶴龜●黒髪●雀踊屋臺囃子●芝居囃子●筑摩川●越後獅子●蜘蛛拍子舞●芳娘雀●操り三番叟●五條橋●喜撰

●清元之部
淨瑠璃　清元延壽太夫
三　絃　清元　梅吉
淺間●保名物狂

●謡曲之部
寶生九郎
●高砂●隅田川●女郎花●三井寺●草紙洗●羽衣●砧●八島●猩々
觀世清廉
羽衣●松蟲●松風
梅若萬三郎
玉葛●小督局●高砂●弱法師●春榮●嵐山●絃上●三井寺●唐船

●軍歌軍樂之部
海軍々樂隊
軍艦行進曲●行進曲●將校敬禮曲●告別行進曲●雛鶴三番叟●舌出三番叟●六段●決死隊●箏曲落梅●三種酒●ガウオット舞曲●ランサカ舞曲●越後獅子●汐汲み●かつぽれ
陸軍戸山學校軍樂隊
兵式合奏●琴曲六段●安宅●春雨●御所車●清元喜撰●愛國行進●老松

●琴曲及三曲之部
琴　今井慶松
尺八　荒木竹翁
六段●松風●春の曲●みだれ●吾妻獅子●松竹梅

●義太夫之部
淨瑠璃　竹本大隅太夫
三　絃　鶴澤清六
壺坂●萬歳●義經千本櫻●お妻八郎兵衛●一の谷●熊谷陣屋
淨瑠璃　竹本南部太夫
三　絃　鶴澤鶴太郎
寺子屋
淨瑠璃三絃　竹本小清
熊谷陣屋●朝顔日記●加賀見山●太功記●合邦ヶ辻●安達原●壺坂寺●寺子屋●布引の瀧●お染久松●千代萩
淨瑠璃　竹本殿太夫
三　絃　竹本和佐太夫
●太功記●堀川鳥邊山●廿四孝●阿波の鳴門●源平布引瀧

●薩摩琵琶之部
須田綱義
北白川宮殿下臺灣入●吉野落●小督局●廣瀬中佐●小敦盛
吉水經知
九連城●大塔宮義光訣別

●筑前琵琶之部
橘知定
北白川宮殿下臺灣入●扇の的●楠公櫻井の驛●義光武勇錦の御旗

●詩吟の部
深澤恒造
決然去國●孤軍奮鬪●草木●一穗寒燈

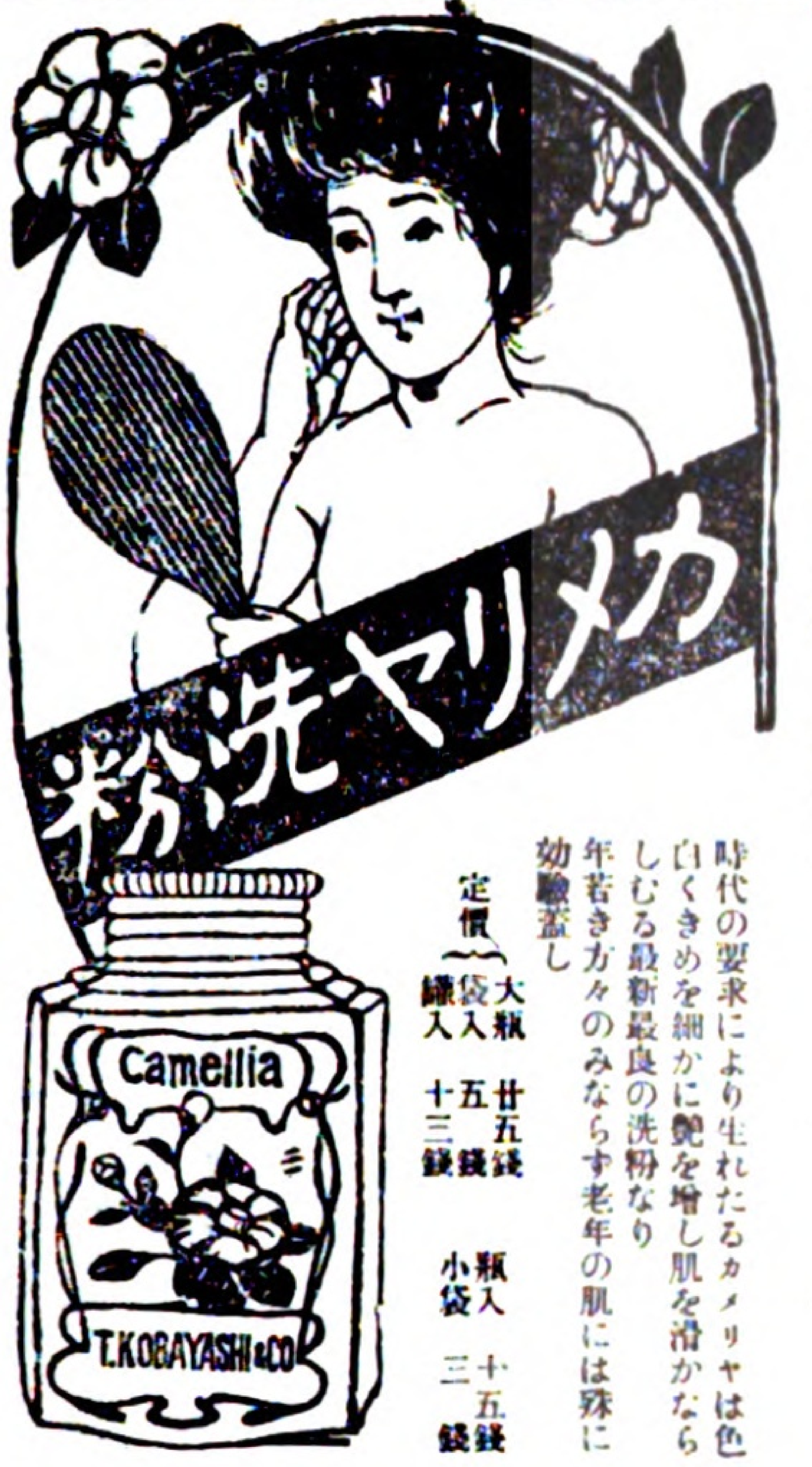
●唱歌之部
唱　歌　納所文子
ピアノ　納所辨次郎
兎ご角大讃●花咲爺●虫の樂隊●電車唱歌●夕立嶋ポッポ●君が代●天長節●大黒樣●出船入船●舌切雀●別れの歌●進め●桃太郎●春の野

●芝居臺詞之部
中村芝翫
忠臣藏（判官切腹）
市川左團次
丸橋忠彌（堀端）●熊谷陣屋●平維茂
市川高麗藏
曾我五郎對面●木村長門守
中村雁次郎
紙治（河庄）●熊谷陣屋

●講談落語之部
美當一調
決死隊（自一至四）
三遊亭圓遊
成田小僧●櫻風呂
柳家小さん
高砂屋●素見道樂●猿
西尾麟慶
丸太夫
鹽原多助馬別れ●義士寺坂吉右衛門●東台俠客新藏兄弟

此他河東節〇平家琵琶〇清樂〇木遣〇新内節〇影芝居〇甚句〇大津繪〇浪花節〇三河萬歳〇端歌俗歌及雜曲等數百種

東洋一手大販賣元
東京市京橋區尾張町貳丁目
電話新橋（特三三三三一五三三）
天賞堂本店



時代の要求により生れたるカメリヤは色白くきめを細かに艶を增し肌を滑かならしむる最新最良の洗粉なり年若き方々のみならず老年の肌には殊に効驗著し

定價　大瓶　廿五錢　袋入　五錢　罐入　十三錢　瓶入　十五錢　小袋　三錢

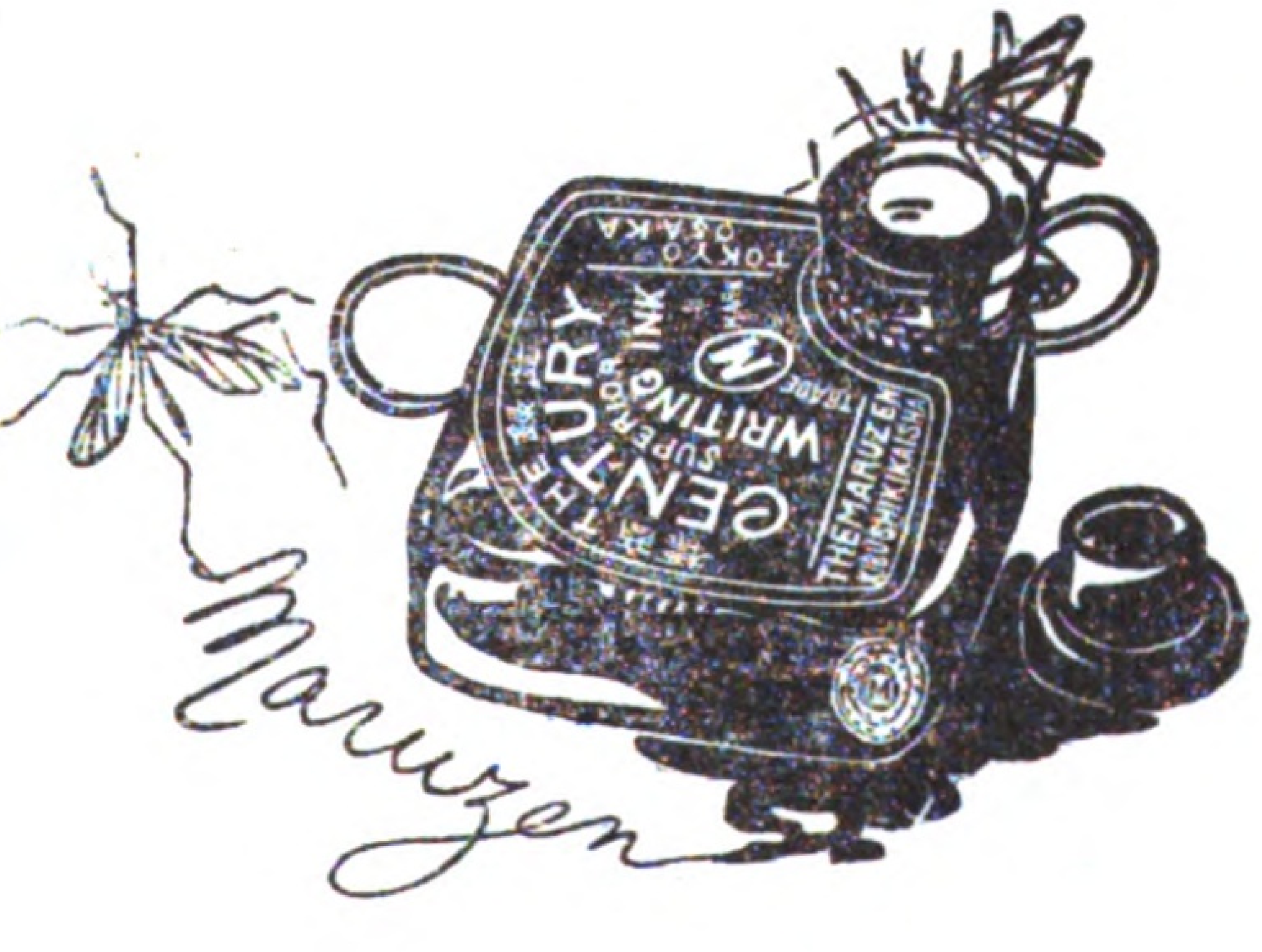
本舗　ライオン歯磨△賣元
東京神田柳原川岸　小林富次郎

二宮尊親先生題字
留岡幸助先生校閲
西谷忠雄先生編
報德修身教科書　和裝美本　全一册
（報德訓并二宮翁肖像入）
定價金貳拾錢　郵稅金四錢

本書は前京都府相樂農林學校長西谷忠雄氏が同校講堂終身に於て模範的人物として二宮尊德翁の事蹟教訓を講話せられ同校訓練の統一を圖られたるものを基礎として編述せられ斯道の大家留岡幸助先生の嚴密なる校閲を經たるものなれば農業學校農業補習學校修身教科用書として特に目下缺乏せる農村青年夜學會修身教科用書として最も適切なるものなり

發兌元　中庸堂書店
東京市神田區西紅梅町十二

理想的インキ
丸善インキを使用せよ
丸善インキは色澤最も美にして褪色せず腐敗せず歳月を經るに到つて墨色益々鮮麗也



各文房具及學校用品商店にあり
●丸善の名に注意せよ

東京
大阪
京都

丸善株式會社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY